

テレポーション・マン

T 「2028年」

○墨田区のアパート・外観（夜）

かなり年代を経た2階建てのアパート。

○2階の一室・居間（夜）

母、岡田由美子（48）と娘の紗枝（2

8）が、食後のお茶を飲んでいる。

小さなテレビにはクイズ番組。

出演者のギャグに二人笑う。

そのとき玄関のドアがバタンと開けら

れ、由美子の夫、岡田武雄（52）が

荒々しく入ってくる。

相当酔っていて、土足で上がり込む。

武雄「とうとう見つけたぞ。

どこへ逃げようと見つけるんだから。

俺をバカにするなよ！」

というなり、持ってきたバットを振り
上げる。

紗枝、母の前に立ちはだかり、

紗枝「お父さん！ やめて！」

武雄、バットを横に払う。

バットは紗枝の左腕に当たり、骨の折れる音が。

痛さに悶絶する紗枝、倒れる。

由美子「あなた、許して！」

武雄「なにお！」

というなり、由美子の頭にバットを振り下ろす。

頭蓋骨の碎ける音とともに血が噴き出す。

由美子はそのまま崩れ落ちる。

そのとき、長男岡田鉄男（25）が帰ってくる。

鉄男「あっ！ なにをする！ このクソおやじ！」

いい放つが早いか、鉄男の姿は瞬時に

武雄の背後に回り、羽交い絞めにする。

武雄の手からバットが落ちる。

そして次の瞬間、二人の姿は消える。

○静岡上空10キロ（夜）

突然現れる鉄男と武雄。

と同時に落下し始める。

鉄男「死ね！」

と両手を解くと武雄の体は、誰もいない工場のコンクリートの地面へと。

次の瞬間、鉄男の姿は消える。

物音に気付いた守衛（63）が近づく。

○鉄男たちのアパートの居間（夜）

鉄男、ボンという音とともに現れる。

鉄男「姉ちゃん！」

紗枝「お母さんは？ お母さんは？」

喘ぎながら、母を心配する紗枝。

鉄男、携帯を取り出し、救急車を呼ぶ。

T（2日後）

○整形外科病院個室

紗枝がベッドに起きて、あらぬ方を眺めて
いる。

左腕と胸はギプスと包帯で固められて
いる。

そこへ池尻達夫刑事（25）と、沼田
芳三刑事（55）が入ってくる。

警察手帳を見せて

沼田「捜査一課の沼田と申します。

岡田紗枝さんですね。

お加減いかがですか？」

紗枝「はい」

沼田「少々お尋ねしたいことがあるんですが、
よろしいですか？」

紗枝「はい」

池尻「あの、お父さんは裁判所から、あなた
方3人に接近禁止命令が出ていましたね」

紗枝「はい」

池尻「それでも頻繁にうるつくので、あなた
方はあのアパートに引っ越しを」

紗枝「ええ、10年前です。もうあのことは

終わったと思っっていたんですが・・・」

池尻「それでお父さんは、見つけたお母さんを殺し・・・」

そのとき紗枝が泣き出す。

沼田「ああ、すみません。

（池尻を睨みつける沼田）

どうしても確かめたいことがありまして、許してください。

それから、弟さんの鉄男さんが帰ってきて、止めに入ったんですね」

紗枝「はい」

沼田「そこからがよくわからないんです」

紗枝「・・・」

沼田「そこで弟さんの話では、もみ合っているうちに、お父さんが逃げ出してしまっ
たと。

それから救急車を呼んで・・・」

紗枝「そのとおりです」

池尻「あの・・・その後のお父さんの足取りが掴めないんです」

紗枝「・・・わたしにもわかりません」

池尻「弟さんはずっとそこにいたんですね」

紗枝「はい。あの、ちょっと横にならせてください」

沼田「ああ、気づかずにすみません。

あの、なにか思い出したことがあったら知らせてください」

と名刺を差し出す。

紗枝「はい」

○病院駐車場

池尻「あの静岡の変死体は、なんですかね」

沼田「岡田武雄であるはずがない」

池尻「でも、ポケットに期限切れの岡田武雄名義の運転免許証がありましたよ」

沼田「さあ、さっぱりわからない。

ともかくそいつの歯型鑑定とDNA鑑定の出るのを待とう。

それとこのあたりの防犯カメラをしらみつぶしに当たろう」

唇に指を当て、目くばせする。

紗枝、うなずく。

紗枝「屋上へ行ってみない？」

鉄男「うん」

鉄男、紗枝の右腕に手を当ててベッドから降ろす。

○病院屋上

陽が当たり、まぶしい。

鉄男「腕、痛くない？」

紗枝「痛み止めが効いてるから」

鉄男「そう」

紗枝「それでお父さんは・・・」

鉄男「俺が殺した」

紗枝「どうやって」

鉄男「空の高いところから投げ落とした」
身震いする紗枝。

紗枝「・・・」

鉄男「ああいうことが起きれば

百回でも千回でも俺はあいつを殺す。

けど・・・、なんか辛いんだ」

紗枝「・・・」

二人は大きなため息をつく。

鉄男、頭を掻きむしる。

紗枝「あんたの超能力は、高校生ごろからだ
ったわね」

鉄男「うん」

紗枝「ときどき使うの？」

鉄男「いや、なんだか怖くてやりたくない」

紗枝「そうね。そのほうがいいわね。

人には黙ってるのよ」

二人、静かに雲を眺める。

鉄男「あの、姉ちゃん」

紗枝「なに？」

鉄男「あの部屋をかたづけたら、大家さんに
見てもらって、引っ越しするつもりなんだけ
ど、いい？」

紗枝「そうね。

あそこに住むのはちょっと・・・」

鉄男「お母さんの葬式どうする？」

紗枝「葬式はしません。

お骨をもらったなら、手元供養の小さな骨壺に入れて、家で供養しましょう」

鉄男「田舎の岡田の墓には、入りたくないよね」

T 「2035年 火星大接近の年

筑波・JAXA宇宙博。」

○展示会場横の芝生広場

広場は人気がない。

ベンチに二人の男が座っている。

T 「JAXA理事 福井良平（63）

NASA火星移住担当

ティム・マクニール（59）」

福井「大変なことになったね」

マクニール「うん。

今朝の一報で知ったんだがね。

夕方の便で帰国するよ」

流ちょうな日本語で話すマクニール。

二人大きなため息。

福井「いったいどうなったんだ」

マクニール「マーズ7号に姿勢制御エンジンがあるだろう。」

そのメイン燃料タンクの、ベントバルブが故障して、ノズルから噴射できなくなった」

福井「なにか手立てはあるのか」

マクニール「たぶん難しいね」

福井「だと、どうなるんだ」

マクニール「火星まで、あとおよそ2000万kmだが、軌道が0.1度ずれても、マーズ7号は火星に着けない」

福井「ああ・・・」

少し離れたところに、あの岡田鉄男(3

2)がポケットに手をつっ込んで歩い

て来る。

身長170cmくらい。

肩幅が広く、腕力は有りそう。

顔はエラが張り、鼻の穴は大きく、目と目の間隔が少し広い。

とてもイケメンには程遠い。

ただ細い眼だけが優しさを湛^{たた}えて居る。

展示場脇の歩道を5歳くらいの男の子が走っている。

その時、キュルキュルとブレーキの音がしたかと思うと、建物の角を赤いスポーツカーが猛スピードで男の子のほうへ。

次の瞬間、鉄男の姿が消えたかと思うと、男の子のそばへ。

そのまた次の瞬間、鉄男は子供を抱えて20m先の芝生へ。

急ブレーキの音。

車の窓から若い男が

若い男（19）「バカヤロー。どこ見て歩いてんだ！」

叫ぶなり、猛スピードで広場の外へ。

マクニール「あっ！」

福井「あっ！」

マクニール「テレポーション！」

福井「瞬間移動！」

マクニール「見たか？」

福井「見た！」

二人は駆け出す。

鉄男と男の子の傍に駆けってきた二人。

福井「ああっ、びっくりした。大丈夫かい」

それを聞いて男の子は大声で泣き出す。

近くのベンチで背中を向けてほかの母

親と話し込んでいたその男の子の母親

が駆けてくる。

母親A「まあ、どうしたの！」

お母さんのそば離れちゃいけないっていつ

たでしょう。

あんた、この子になにしたの。

警察呼ぶから」

福井「何言ってるんですか奥さん。」

この人はお子さんが車に轢かれそうになっ

たのを助けたんですよ」

母親 A 「ウソッ」

福井 「嘘なもんですか。小さいお子さんはよく見ていないと」

母親 A 、フンと踵を返して子供の手を邪険に引っ張り、離れてゆく。

福井 「ひどい母親だ、礼も言わないで」

福井、鉄男の方を振り返り、胸のポケットから名刺を取り出し、鉄男に渡す。

福井 「はじめまして。私は J A X A の理事をしております福井と申します。

こちらは N A S A のマクニールさん」

マクニール 「どうぞよろしく」

鉄男 「あ、はい。．．．こちらこそ」

福井 「それで、君の名は？」

鉄男 「．．．鉄男と申します」

福井 「名字は？」

鉄男 「それは勘弁してください」

福井 「ふーん、ま、いいでしょう。

ところで今君がやった瞬間移動ね」

鉄男「・・・」

福井「話したくないのかい？」

鉄男「人に知られると困るんです」

マクニール「そりゃあそうだろう。

もし世間に知れ渡ったら、世界中の諜報機

関や、軍事戦略部門が先を争って君を確保

しようとする。

ほんとにそれは、君の言う通り危険なこと
だ」

福井「そうだな、そのとおりだ。

ごめん。

でも、君のその能力が・・・テレポーター
ションっていうんだけど、人のためになる
んだったら・・・」

鉄男「・・・」

福井「お願いがあるんだけど、君のその能力
を調べさせてもらえないかね。

もちろん極秘で」

鉄男「・・・」

福井「たのむよ。お願いだから」

鉄男「ええ、まあ」

福井「本当かい、それはありがとう。」

マクニール「それでね、君の超能力は、自分だけ瞬間移動するのではなく、君が触っているものも一緒に移動するんだね」

鉄男「そうです」

マクニール「一緒に移動できる物の大きさや重さはどのくらい？」

鉄男「さあ」

マクニール「今までで一番重いものを動かしたのは？」

鉄男「以前脱輪したダンプを、人が見ていないときに道路に引き上げたことがあります」

マクニール「移動できる距離は？」

鉄男「こっそりオーストラリアまで跳んだことがあります」

福井「直接？」

鉄男「いえ。

一度飛行機で観光して、帰って来てから跳

びました。

この目で見ていないところへは跳べません」

マクニール「ちよつと、電話してくる。思いついたことがあってね」

福井「ああ」

マクニール、100mほど離れて携帯電話で話し出す。

福井「テレポーションするとき、何が起こってるの？」

鉄男「なんというか、その・・・。

周りの空間をゆがめて、移動先を引き寄せらるって感じかなア」

福井「鉄男君、重いものを動かすのはたいへんなんでしよう」

鉄男「いいえ、一枚の紙を右から左に移す程度です」

福井「へえ。ちよつと想像できないなあ。

君のその能力を知ってる人はいるの？」

鉄男「・・・いいえ」

福井「その能力は遺伝なの？」

君の肉親で同じ能力を持っている人は」

鉄男「いいえ、いません」

マクニール、小走りで行ってくる。

マクニール「鉄男さん、今から横田基地に

一緒に来てもらえないだろうか」

福井「なんだい、突然」

マクニール「君も来てくれ。」

鉄男さん、頼むよ」

鉄男「今日は休みだから・・・」

マクニール「じゃあ、行こう」

○米軍横田基地・検問所（夜）

車の窓からIDを提示するマクニール。

検問官ロバート・ジョーダン（31）「The

Commander would like to see you,

sir」

字幕（司令官が会いたいそうです）

マクニール「Yes. You'll show me around,

won't you? 」

字幕 (そう。案内してくれるかね)

ジョーダン 「Yes, ser」

検問官、助手席に乗り込み、運転手に指示する。

車は管理棟へと動き出す。

○第五空軍司令部・司令官室(夜)

司令官 アルバート・ウエイン大佐

(62)、出迎える。

マクニール 「Sorry for the abruptness.

I'm McNeill from NASA.

This is Dr. Fukui of JAXA.」

字幕 (突然にすみません。

私はNASAのマクニールです。

こちらはJAXAの福井博士です)

ウエイン 「I am the Fifth Air Force

Commander, Wayne.

I've received instructions from The President.

What the hell is going on? 」

字幕 (司令官のウエインです。)

大統領からの指示がありました、
一体何事ですか)

マクニール 「I need to borrow a C-130

transport plane to prepare for an

upcoming magic show in front of the

President.」

字幕 (大統領の前でマジックをやります。)

それでC130を貸してほしいのですが)

ウエイン 「I'll lend it to you since the

President ordered it,

But I doubt you'll break it.」

字幕 (大統領令ですからお貸ししますが、
壊すようなことはないでしょうね)

マクニール 「It'll be fine」

字幕 ((鉄男のほうを見ながら)それは大丈夫
です)

ウエイン 「Do you're going to make it

fly.？」

字幕 (飛行させるのかね)

マクニール「No, it will remain parked as it is now.

Well, then, let's get started.」

字幕（いいえ、現在の駐機のままです。

では早速お願いします）」

ウェイン「Okay, this way, please」

字幕（じゃ、こちらへ）」

○ C 1 3 0 輸送機のそば（夜）

巨大な輸送機が黒々と横たわっている。

ウェイン「He is the pilot, Mike Kendall」

字幕（彼がパイロットのマイク・ケンドール（35）です）」

マクニール「How do you do.

You, myself, and this man, Tetsuo, will be on board.」

字幕（よろしく。

あなたと、私と、それからこの鉄男さんが乗ります）」

ウェイン「Who is he?」

字幕（その人は？）

マクニール「He is the magician」

字幕（マジシャンです）

ウェイン「Oh, I see.

Well, Kendall, show them the way.」

字幕（ああ、なるほど。

じゃあ、ケンドール、案内してくれたまえ）

三人は、コックピット横の昇降口から

機内にはいる。

ウェインと福井は歩いて管制棟に。

○ C 1 3 0 コックピット（夜）

マクニール「That's the captain's seat on
the left.」

字幕（左が機長席だね）

ケンドール「Yes, ser」

マクニール「鉄男さん、そこに座って。

操縦桿に手を添えて」

ケンドール「Please don't touch anything
else.」

字幕（どうぞ他の物に手を触れないように）
マクニール「鉄男さん、他の物には触らない
ようにね。」

Contact tower to turn on runway right
guidance lights. J

字幕（管制塔に連絡して、右滑走路の誘
導灯を点灯するように）

ケンドール「Yes, ser J

○横田基地・航空管制棟（夜）

管制官クリス・フオワード（42）「He wants
us to turn on the guide lights, sir. J

字幕（誘導灯を点灯してくれとのことす
が）

ウェイン「OK J

誘導灯が、はるか彼方で灯る。
福井、外の様子を携帯で動画撮影し始
める。

○ C 1 3 0 コックピット（夜）

マクニール「鉄男さん、あの誘導灯のところまで機体を動かして」

鉄男「はい」

副操縦席のケンドール、怪訝な顔をしながらマクニールを見上げる。

マクニール「まだかね、鉄男さん」

鉄男「もう移動しました」

マクニール「ええっ？」

外には煌々と誘導灯が間近に。

ケンドール「Oh my God !」

何の物音も立てずに機体は滑走路端に。

マクニール「じゃ、今度はもとの所へ戻して」

輸送機は瞬時にもとの場所へ。

○ 管制塔（夜）

ウエイン「Oh !」

笑いながらうなづく福井。

口を開け、あきれる管制官。

ウエイン「How the hell did you do

that?」

字幕（いったい、どうやったんだ？）

福井「I can't divulge the nature of the
magic trick.」

字幕（マジックの種明かしはできません）

ウエイン「woom」

○ 横田基地食堂（夜）

周囲に兵士のいない席で、鉄男と福井
とマクニールが簡単な食事を。

マクニール「鉄男さん、さっきのことで君の
テレポーターション能力が証明された。

そこで君にお願いがある」

鉄男「なんですか」

マクニール「マーズ7号のことは知ってい
る？」

鉄男「ええ。何か月か前に火星に向けて出発
した火星移住ロケットですね」

マクニール「そうだ。その7号にトラブル
が起こったんだ」

マクニール、15インチのタブレット

を取り出し、テーブルに置く。

マクニール「7号には回転ホイールの上に、
回転しないリングがあり、そこに十文字に
4個の姿勢コントロール用の噴射ノズルが
ついているが、それが働かなくなった」

マクニール、タブレットにマーズ7
号の写真を表示してホイールを指さす。

鉄男「どの程度大変なんですか」

福井「ロケットは火星に着くまでに何度も姿
勢をコントロールしている。

特に、出発と到着、それから出発8か月後
に減速のため、パラボラを火星軌道上のプ
ラズマビーム砲に向けるとき」

マクニール、地球と火星の間に浮かぶ
マーズ7号を180度回転させる

鉄男「プラズマビームで動いていることは知
っていましたが・・・」

福井「それまでは地球のISS2からのプラ
ズマビームを受けて、そのエネルギーで飛
んでいたが、そのままだと火星近くでは秒

速30キロ以上になり、火星を通り過ぎて
しまう。

そこで途中で、パラボラの向きを火星に向
けて、火星軌道上のプラズマビームを受け
て逆噴射して、火星に着くころには時速1
00キロぐらいに減速する」

マクニール「しかし、姿勢制御がうまくいか
ないと、たいへんなことになってしまう」

福井「7号には、火星移住者家族50人と、
乗組員夫婦3組、合計56人が乗っている。

彼らの命が危険にさらされる」

鉄男「・・・」

3人とも押し黙ってしまふ。

マクニール「そこで君にお願いがある。

君のその能力で7号を助けてくれないかと
いうことだ」

鉄男「しかし」

マクニール「今、ISS2、国際宇宙ステー
ション2のそばにマーズ8号がいる。

マーズ7号と一緒に出発するはずだったが、

移住者を乗せるロケットの故障で、今は浮かんでいるだけだ
それに乗ってテレポーションで7号を追いかけてほしい」

福井「それはまた！」

鉄男「無茶ですよ。私は宇宙船の操縦なんかできないし」

マクニール「それは心配しなくていい。

8号には高性能なコンピューターが載っていて、全部やってくれる」

福井「今から出発しても、とても追いつけな

いが・・・」

マクニール「そこだよ。

まず鉄男さんに月まで瞬間移動してもらおう。

それが成功すれば、百数十回、同程度のテ

レポートをすれば、7号に追いつく」

鉄男「月までの距離は？」

マクニール「385000Km」

鉄男「無理ですよ。無理、無理」

マクニール「やってみたことは？」

鉄男「無いに決まってるじゃありませんか」

マクニール「こちらもダメで元々と考えている。

そんなに責任を感じなくていい」

鉄男「でも・・・」

マクニール「私が考えたプランはこうだ。

まず君に多少の訓練を受けてもらう。

それから、君はロケットを使わずに、地上から宇宙服を着て、直接8号にテレポートする。

今現在、地球から跳べる宇宙船がないから」

鉄男、頭を抱える。

マクニール「君が8号にテレポートできなかつたときは、この話は無かったことにする」

福井「おどろいたなあ」

マクニール「次は8号を1回で月まで移動させる。

これも失敗だったら、私もあきらめる。

そのときは君は地球に帰ってくればいい。

この時点では、マーズ8号になんの損傷も

起きないはずから、大統領もNASAも了承してくれた」

鉄男「ああ・・・」

マクニール「頼むよ。」

7号の56人の乗客・乗員を助けるために」

鉄男「一晩考えさせてくれませんか」

福井「そうた、そのほうがいい。」

私の名刺に電話番号も載っているから、決

まったら電話して」

マクニール「私はすぐアメリカへ帰国する。

連絡は福井さんを通じて」

○新幹線新横浜駅前（夜）

タクシーから鉄男降りてくる。

鉄男「失礼します」

福井「ああ、じゃあ電話待ってるよ」

鉄男「はい」

一礼して、鉄男、駅の構内へ。

後ろのタクシーから降りてきた男が福

井のタクシーに近づき、ガラスをコン

コンと。

福井、タクシーの窓を開く。

男「杉原探偵事務所の和久井（55）と申します。

（鉄男を指さしながら）あの人を尾^っ行^けるんですね」

福井「そうです。よろしく」

和久井「はい」

和久井、さっさと鉄男を追う。

○嵐山精機の工場・外観（朝）

○嵐山精機社長室（朝）

鉄男、ドアを開けて入ってくる。

鉄男「おはようございます」

中山幸三社長（71）「やあ、おはよう。朝早くなんだね」

鉄男「すみません、社長。

急なことで申し訳ありませんが。会社を辞めたいと思います」

中山社長「え？ え？」

鉄男「驚かしてすみません」

中山社長「本当かい？」

鉄男うなづく。

中山社長「なんか待遇に不満でもあるのか？」

鉄男「いえ。社長にはよくしていただいて感謝しております。

会社に何の不满もありません」

中山社長「じゃ、なんで」

鉄男「以前から考えていたんですけど、日本中を歩いて旅をしてみたいと」

中山社長「休みの時に旅行するのではだめか？」

鉄男「だめです。すみません」

中山社長「金はあるのか？」

鉄男「足りなくなったら、行った先でアルバイトしようと思っています」

中山社長「ふうーん。まあ君のことだから、これ以上止めてもだめなんだろうね」

鉄男「ほんとにすみません。

高校卒業前からここへ押しかけて仕事を教えていただけで、この御恩は忘れるものではありません」

中山社長「ふうん、そうか。

じゃ、旅行が終わったらここへ帰ってこいよ、よそに行くんじゃないぞ」

鉄男「はい、それはもう」

中山社長「じゃ、元気で行ってこい」

鉄男「ありがとうございます。

仕事のことは、昨夜のうちに、先輩に引き継ぎましたから」

中山社長「そうか。うん、うん」

鉄男「失礼します」

鉄男、一礼して部屋を出る。

○嵐山精機工場入口（朝）

鉄男、工場に深々とお辞儀する。

○ J A X A 筑波宇宙センター・外観（朝）

○宇宙センター正面受付（朝）

カウンターへ向かう鉄男。

受付嬢（２２）「いらっしゃいませ」

鉄男「福井理事にお目にかかりたいのですが」

向こうから福井がやってくる。

福井「やあ、おはよう」

鉄男「おはようございます」

福井「よく決心してくれたね、ありがとう。」

じゃ、こっちにきて」

福井に導かれて部屋の外へ。

○ J A X A 宇宙飛行士訓練棟・外観（朝）

○訓練棟事務室（朝）

町田百合（４３）出迎える。

福井「おはよう」

町田「おはようございます」

福井「昨日極秘に知らせた鉄男君です。」

鉄男君、こちらが訓練担当の町田君」

鉄男「おはようございます。よろしくお願
い
します」

町田「こちらこそ。

福井先生、彼が超能力者って、ほんとなん
ですか？」

福井「ほんとなんだよ。誰にも話してないだ
ろうね」

町田「はい、それはもう」

福井「じゃ、頼むよ」

町田「はい。鉄男さん、ついてきてください」
鉄男「はい」

○JAXA国際会議室（朝）

小学校の体育館ほどの広さ。

そこには誰もいない。

椅子もテーブルもかたづけられている。

町田は鉄男を演壇前に立たせる。

町田、鉄男に大きなゴーグルを渡す。

町田「今日は、マーズ8号の実際の立体画像
を見てもらい、テレポートする場所の感じ

をつかんでもらいます。

ゴーグルの右側のスイッチを入れてから、
装着してください」

町田、テーブルの前に座り、コンピューターに触る。

鉄男、ゴーグルを頭に被る。

目の前には、宇宙の星々の中に、ISS2とマーズ8号が浮かんでいる。

町田「これが国際宇宙ステーションISS2とマーズ8号の全景です。」

画像は次第に8号に接近。

町田「このマーズ号という宇宙船は、着陸船を火星に届け、2年後に地球に帰ってくるという優れた特性があります。

その最大のポイントは、燃料を積まなくていいということです。

推進力は、太陽光から精製されるプラズマビームです。

地球と火星の軌道上のプラズマビーム砲からエネルギーを受け取り、それを噴射して

進むからです。

さらにプラズマビームの広い光軸によって、宇宙船全体に、宇宙放射線のバリアーが作られます。

さらに20往復できる耐久性があります」

画面は巨大な輪に近づく。

町田「そのホイールという輪が乗組員の居住区で、回転して遠心力で人工重力を作ります。

中央に鉛筆みたいに突き出たのが火星着陸船です。

着陸船の周囲に小型のロケットが4本ありますが、それは物資運搬用のものです。

歩いて着陸船の先端に移動してください」

鉄男、数歩歩くと着陸船の正面に。

町田「先端に赤い大きなリングが描かれています。

そこがエアロックです。

左手で窪みの中の取っ手につかまり、右手を伸ばして、エアロック横の金具をつかん

で、下に引き下ろしてください」

言われたとおりに手を差し出すと、ゴ
ーグルの中で、宇宙服に包まれた自分
の腕が伸びるのがわかる。

町田「その中にボール状のハンドルがありま
すから、右へ1回、回してください」

するとエアロックがゆっくり開く。

町田「なかへ歩いてください」

歩いてエアロック内部へ。

町田「入ってきたスライド・ドアの右の赤い
大きなボタンを叩いてください」

すると、ドアは素早く閉じる。

町田「振り返って、船内に入るドアのところ
まで歩き、横の赤のボタンをたたいてくだ
さい。

エアロックに空気が満たされると、ランプ
が緑色になります。

そうしたら、ボタンをもう一度叩いてくだ
さい」

たたくと、ドアが開き、船内へ。

町田「外へ出て、ドアの横の緑のボタンを叩いてください。」

ここまでが船内に入る手順です」

エアロックのドアはスルスルと閉じる。

その部屋には5体の宇宙服が。

町田「ここから、宇宙服なしのモードです。」

鉄棒の前に立ってください。

まずヘルメットを取ってください。

ロックをはずし、左へ少し回せば外れます。

手首の操作ボタンの *detaching* と書かれ

たボタンを押してください。

これは不用意に操作されないように、5回押すようになっていきます」

すると背面のジェットパックや酸素ボ

ンベのついたカバーが、パカッと後ろ

に倒れる。

町田「両手を宇宙服から抜いて胸の前で交差させ、それから体を後ろに大きくそらして、両手を宇宙服から出して鉄棒を握ります。すると鉄棒が自動でゆっくり上へあがって

体を出します。

着陸船のなかは無重力です。

壁にくっつけてあるスキッパーシューズを一足取って履いてください。

シューズには面ファスナーがついていて、床に密着して歩けます。

その部屋の中央の湾曲した壁に向かって動いてください」

鉄男3歩歩く。

面ファスナーのジャリジャリという音。

町田「そこに開口部があります。

その中に入ってください」

鉄男が言われた通り入ると、そこは筒状の空間で、壁には長い梯子が伸びている。

ゆっくり鉄男は、梯子を伝いながら筒の奥のほうへ。

○着陸船中央通路の中

町田「周りに見えるのは、着陸するときの座

席を並べた部屋です。一室に10人入れます。

こういう部屋が5つあります

梯子を伝いながら下へ降りてください」

5つ部屋が過ぎたとき、床に当たる。

○メイン操縦室

大小のモニター群と、操作卓。

座席シートが6つ。

町田「ここがメイン操縦室です。

操縦室は、予備にホイールにもあります。

乗組員の活動する部屋です。

壁の円形の出入り口の前に立って、その鉄棒を握って、足からその中へ入ってください
さください」

○スポークシャフト内部

鉄男が鉄棒を両手で握ったとたん、

体が筒の中に吸い込まれる。

町田「このシャフトは、スポークと言って、

着陸船と、回転しているホイール居住区を
結ぶ通路です。

足に乗せる台に乗ってください。

目の前の黄色いボタンを押すと、ベルト駆
動で君を下へ移動させます。

進むにつれ重力が増していきます」

ゴトンという音とともに落下が止まり

壁の扉が開き、明るい部屋が開ける。

○回転ホイールのルームA

高さ3m・長さ10m・幅5mの部屋。

一面に積み木を重ねたような、6つ
の小部屋。

町田「その箱状の部屋は防音ベッドルームで

夫婦やその家族が一部屋使います。

その中は足を投げ出して、テーブルで仕事
もできます。

外の部屋のテーブルで食事などできます。

左に進んでください。

部屋の奥の小部屋は、トイレとシャワール

ム兼洗面所です。

シャワーは一人につき1週間に1回、2分間で、その水は洗面所の水や、トイレの尿とともに浄化され使いまわされます。」

鉄男「衣服はどうするのですか？」

町田「紙でできた下着・タオルは廃棄します。」

ポロシャツとスラックスは2週間に1回交換します。

交換したものはまとめて火星に運びます。火星には水がありますから、洗濯ができます。

火星では、衣類の調達は大問題で、擦り切れるまで大事に着続けます。」

突き当りにドアが。

町田「緑のボタンを押してください。」

鉄男がボタンを押すとドアが開く。

町田「通常は、この隔壁は電動で開閉しますが、停電の時はドアのレバーで」

その部屋にはベルトで固定された大量の資材が並んでいる。

町田「そこは資材庫で食料・水・衣類・装備品などが入っています。

居室と資材庫は一つ置きに並んでいます。なぜだかわかりますか」

鉄男「たぶん・・・、万一隕石などのメテオロイドなどが飛び込んできて、ある部屋を壊したとき、隔壁でほかの部屋の人たちや資材を守るためには・・・」

町田「そう、そのとおり。

ちよつと潜水艦に似てるけどね。

さて、マーズ8号のあらましを見てもらいました。

ここから、一人で、さっきのエアロックまで行って、そこからまた戻ってきてください」

こうして訓練は続く。

○同・会議室

町田「お昼になりました。朝の訓練は終わり。

ゴーグルを外してください」

鉄男、ゴーグルをはずす。

額にびっしり汗。

町田「こちらへ」

促され、鉄男は町田に続く。

○ 控室

部屋に入ると、町田が椅子を勧める。

町田、紙袋からバーガーを取り出し、

鉄男と自分の前に並べ、ポットからコ

ーヒーをふたつのカップに注ぐ。

町田「こんなものでごめんなさい、

福井先生から、あなたがほかの人と接触し

ないようにといわれていますので、食堂も

使えません」

鉄男「一向にかまいません。ありがとうございます
います」

町田「どうぞ。ハンバーガーはお嫌いじゃな
かったですか？」

鉄男「いえ。よく食べています。いただきます
す」

といいながら、包装を解いて食べだす。

鉄男「いただきます。

あ、これ、お支払いします。

いくらですか？」

町田「いえ、これはJAXAの費用」

鉄男「ほんとですか？　じゃ、ステーキも」

笑い出す町田。

町田「そんなのだめよ。JAXAは貧乏なの」

鉄男「冗談ですよ、冗談」

町田「あなた、お肉好き？」

鉄男「子供のころは、年に一回ぐらいしか食べられませんでした。

お金はあらかた父の酒代に消えていたから。

父はひどい奴で、酒を飲んでは母や私たちを殴っていました」

と、そこまで言って、鉄男気づいて口を押える。

鉄男「いましゃべったことは、聞かなかったことにしてください」

町田「わかったわ」

鉄男「すみません」

町田「結婚してるの？」

鉄男「いいえ。結婚はできません。

超能力を人に知られると、妻や子に災難が
及びますから」

町田「好きな人はいたんでしょう？」

鉄男「ええ、でもあきらめました。

江戸時代の葉隠はかくれという本があるでしょ
う？」

町田「突然なに？」

鉄男「突然でもないです。

その中に（恋い死なん 後の煙のちにそれと知
れ 終ついにもらさぬ 中の思いは）という歌
がありました。

恋の極意は忍恋、耐え忍ぶ恋だそうです」

町田「うーん」

鉄男「これを読んだ時、ああこれだと思いま
した。

死んだ後の自分の遺体を燃やす、焼き場の
煙に、恋焦がれていたこの気持を察してく

れという・・・」

町田「すごいこと知ってるのね。」

いまだき流行らないけど」

鉄男「流行り廃りの話ではありません。」

これは恋して死ぬほど苦しい私の心の唯一の支えでした」

押し黙る二人。

町田「ところで本当にテレポーターションができるの？　あなたは」

鉄男「ええ。やってみましょうか？」

町田「ぜひ」

次の瞬間、鉄男の体が椅子と一緒に部屋の間へ。

町田「まあ！」

そしてまた次の瞬間、鉄男はもとの位置へ。

町田「ほんとだったのね。驚いた」

鉄男、コーヒーを一啜り。

町田「福井先生は、あなたがマーズ8号を、7号の近くまで短時間に移動できるので

はと、お考えですが・・・」

鉄男「それは私にもわかりません」

町田「そう、そうよね。」

そんなことやるチャンスもないし・・・。

コーヒーのお替りどう？」

鉄男「いえ、もうけっこうです」

町田「じゃ、今から健康診断をします。ついできてください」

○ J A X A 医務室

部屋には白衣の男が一人。

町田「先生、こちらがお話した鉄男さん。」

鉄男さん、こちらが診断してくださる大井

先生」

大井明医師（52）「やあ、いらっしやい」

鉄男「こんにちは」

町田「じゃ私はこれで」

鉄男「はい、ありがとうございました」

こうして、問診、計測、診断と続くこ
と2時間。

大井医師「済みました、どうぞこちらへ」

窓際のテーブルに招かれる。

大井医師「あなたの体には、とりあえずなんの異常もありません。

今から、いろんな予防接種をします。

予防と言っても宇宙船の乗組員はほとんど病気のリスクの無い人たちが選ばれていますから、この接種はあなたがほかの乗組員に感染させる危険を防ぐためです」

鉄男「注射はいやだな」

大井医師「子供みたいだね。

じゃ、こちらへ」

複数の注射器の並んだテーブルへ。

大井医師「ほんとなら遺伝子検査で、君がどんな病気の可能性があるか調べるんだけど、時間が無いから」

○ JAXA 訓練センター 正面玄関（夕方）

町田が鉄男を連れて出てくる。

町田「今日はお風呂はだめよ。それからお酒も」

鉄男「はい」

町田「それじゃあ明日は安静にして、あさつて来て下さいね。」

なにか、熱が出たり、苦しくなったらここへ電話してね」

町田、カードを渡す。

鉄男「ええ」

そこへ福井理事がやってくる。

福井「やあ、終わったかね」

鉄男「ああ、はい」

福井「町田君、ごくろうさん」

町田「いいえ。先生、じゃ私はこれで」

福井「ほんとにありがとう」

町田、一礼して、構内へ。

福井「鉄男君、ちよつと食事しながら話さないかね」

鉄男「なんですか」

福井「うん。ちよつとね。」

そう時間は取らせないから、いいだろ

う？」

鉄男「ええ、まあ」

福井「じゃ、行こう」

○ 寿司屋の奥まった一室（夜）

福井「さあ、どうぞ」

目の前には、握り寿司と汁椀と3種類の副菜が。

福井「お酒はダメだったね」

鉄男「そうらしいです」

二人箸を動かし始める

福井「実はね、君の身分について考えることがあってね」

鉄男「身分？」

福井「君は会社を辞めてきたんだってね」

鉄男「ええ。迷ったんですけど。」

なぜ知ってるんですか？」

福井「君には申し訳ないが、調査機関を使って君を調べさせた」

鉄男「ええ！ それは・・・」

福井「立場上、どこの誰ともわからない人にこんな大きなミッションを、ノーチエックで任せるわけにはいかない。許してくれ」

鉄男「・・・」

福井「それで君の人となりも判ったし、真っ正直な人だということもわかった。

岡田鉄男君。

会社を辞めてまで協力してくれる君をそのままにすることはできないよ。

そこで君をJAXAで雇うことにした」

鉄男「ええ？」

福井「そりゃあそうさ。15年も勤めてきた会社を辞めるんだから、こちらもそれ相当の覚悟がいります」

鉄男「はい。でも・・・」

福井「いいんだ。気にしなくても。

そこで、この書類にサインをしておいてくれないか」

3枚の書類を広げる。

福井「1枚は契約書で、1枚が乗組員の特別
生命保険関係、こちらが給与振り込み口座
依頼書類。あさって来るときサインして持
ってきてくれたまえ」

鉄男戸惑う表情。

福井「それから、もし、このミッションで、
万一君が怪我したり、死亡したときには、
君のお姉さんに連絡を取ります。

ここまでするのは君固有のプラシバシーの
侵害だとは分っているが、私の心情として
は、そうせざるを得ない。分かってくれ」

鉄男、深く頭を下げる。

鉄男「すみません。そこまで気を使っていた
だいて」

福井「いや、当然のことだから。

さあ、食べよう」

二人、箸を動かし始める。

福井「ああ、それから、君は体一つで宇宙
服をまとって8号まで跳ぶわけだから、
なんの荷物も持っていけない。」

鉄男「着替えなんかは？」

福井「全部そろっている。大丈夫」

鉄男「へえ」

○ J A X A V R 訓練室（朝）

小さな部屋に入ってくる鉄男と町田。

中は一脚の椅子とテーブルだけ。

後ろの壁には、隣の操作卓がガラス越

しに見えている。

町田「熱は出なかったみたいね」

鉄男「はい、大丈夫でした」

町田「そう、それはよかった。

では、今日は最後の訓練で、地上からマ

ズ8号に飛び乗るためのプログラム。

そこに座ってください」

鉄男着席する。

町田「この3Dゴーグルを着けて」

この間と同じゴーグル。

町田「私は隣の部屋で指示します」

そうやって部屋を出てゆく町田。

ゴーグルを着ける鉄男。

ゴーグルにはほんのりと明るい空。

町田「(スビーカーから)これは朝方4時頃の
空で、今右からISS2と、マーズ8号が
一緒に上ってきます。

どちらも高度400Km」

小さな光る二つの点が右から左へ動い
てゆく。

町田「8号を静止した状態で観察します」

8号までの距離は10Km」

はつきりと8号の、ドーナツ状の
回転部やパラボラが見える。

町田「8号まで5Km」

横に長い全体が表示される。

町田「8号まで1Km」

ゴーグルの右から左まで全部8号の画
像が広がる。

町田「8号の速度を、ほんとの速度に戻し
ます」

途端に、轟音とともに、巨大な構造物

が右から左に、一瞬で移動。

右を振り向くと、あっと言う間に8

号は小さな点に。

町田「その音は、プラネタリウム用に付け足したもので、ほんとは何の音も聞こえませんが。どうですか？」

鉄男「(大きくため息をつきながら)、驚いた」

町田「そうでしょうか？ その8号に君は飛び乗るんですよ」

鉄男「いやあ、ほんとに怖くなってきた。

できるのでしょうか、私に」

町田「やってもらわないと困ります。

今度のミッションで一番難しい部分です。君が8号まで一瞬にジャンプして、8号の取っ手に掴まったとしたら、君は動かない静止状態で、相手は1秒に8 Km。掴まったとたんに、君の両腕は千切れてしまいます」

身震いする鉄男。

町田「それを避けるには、君が1秒間に8 K

m 瞬間移動を続けるんです。

それが疑似慣性となって、8号を追いかけ続けることができます」

鉄男「ほんとにそんなことができるんですか？」

町田「わかりません。なにしろやった人がいないから」

鉄男「うーん」

町田「じゃあ、静止画でまず取りつく部分を確認しましょう」

画像は、回転ホイール中央に突き出た着陸船の先端の、赤い円の中にM8と書かれたエアロックに近づく。

さらに近づいて、エアロック入口を表
示。

町田「エアロックへの入り方は前に学習しましたね。」

とりあえず、その取っ手に瞬間移動しながらしがみつくことです。

まず、速度に慣れましょう。

手元にスイッチがあります。

今から8号までの距離1Km 速度秒速

1Kmで絵を動かします。

右に8号が現れたら、1秒ごとにスイッチを押してください。

一回押すごとに1Km移動します」

絵が動き出し、8号が現れる。

鉄男、1秒ごとにスイッチを押す。

そのたびに、8号に近づく画像。

エアロック正面に。

町田「8号までの距離200m、秒速2Km

でもう一度」

今度は先ほどとは格段に速く動く8号。

必死でボタンを押す鉄男。

町田「さらに距離100m」

右から左へ8号が流れてゆく。

ボタンを押す指がこわばる。

この訓練を何度となく続ける。

町田「ごくろうさま。少し休みましょう」

しばらくして町田がコーヒーカップを下げて現れ、1つを鉄男に。

町田「どお？　なんとかやれそう？」

鉄男「さあ」

町田「だめよ。本気にならなきゃ。

56人の命が懸かっているんだから」

鉄男「この先の訓練は？」

町田「最後は距離10m　速度1秒に8Km
でやります。

これで本番のカンを掴んでもらわなきゃ」

鉄男「わかりました」

○ VR訓練室の観察部屋

部屋に福井が入ってくる。

町田「そう、今よ」

VRの画像をモニターで見ている

町田、マイクをOFFに。

福井「どうだね」

町田「ええ、多分いけるんじゃないでしょうか」

福井「そうかね。そりゃあよかった。

後で部屋まで連れてきて」

町田「はい」

部屋を出てゆく福田。

○福井の理事室。

ノックの音。

福井「はいりたまえ」

鉄男、入ってきて、一礼。

福井「きつかったかい」

鉄男「はい」

福井「そうだろうねえ。ごくろうさん。

それで、君が8号に跳ぶ日がきまったか

ら

鉄男「いつですか？」

福井「あさっての朝4時。ここの訓練棟の屋
上から。

そのとき、空に8号が登ってくる」

鉄男「雨の時は？」

福井「雨や曇りの時は中止。目に見えてない

とテレポートできないんだよね。

天気予報では快晴だ」

鉄男「はい」

福井「それでね、鉄男君。

君はお姉さんに最後の別れを告げなきゃいけない。
8号にうまく乗れずに、ぶつかって死ぬかもしれない。

うまく乗り移って、火星への旅を始めたとしても、マーズ8号は移住船だから、地球に帰ることはできない。

これが最後だから、キチンとさよならを言わなきゃだめだ」

鉄男、黙って下を向く。

鉄男「私もそう思っていました」

福井「そうか。うん、そうしたほうがいい。

それで、明日の午後ここへ来てくれたまえ。

あさっての出発前の準備があるから。

明日は、だからここで泊まることになる」

鉄男「はい」

福井「それからこれは契約書のコピーと、保険証」

硬く握手を交わす二人。

○玉井家外観（夜）

古い一戸建ての日本家屋。

○玉井家居間（夜）

食卓を、紗枝の夫、玉井健介（37）、

亨（6）、鉄男が囲んでいる。

奥で紗枝（35）の調理する音。

亨「ねえ、お母さん、鉄ちゃんって、ワニに似てない？

目が細くて、口が大きくてさ」

鉄男「なんだと。俺がワニだって！」

亨「そうだよ」

鉄男「そうか。俺はワニなんだ。

ワニなら、亨を食べなきゃならん。ワオー」

鉄男、亨を抱え込んで食べる真似。

亨、キャツキャツと笑いながら逃れよ

うとする。

亨「お母さん、鉄ちゃんがひどいんだよ」

料理を運んできた紗枝、

紗枝「もうご飯よ」

鉄男「ウム、亨はまずいから食べるのは。やめた」

亨「何言ってるの。ボクはおいしいよ」

鉄男「そうか。おいしいか。」

それじゃもう一度」

紗枝「もうそのへんで、おしまい」

健介「ワニのおじさん、お疲れでしょう。まあ一杯」

鉄男のコップにビールを。

鉄男「ああ、すみません、健介兄さん」

鉄男がビール缶を取って健介に注ぐ
とすると、健介、手で止めて自分のコップに注ぐ。

紗枝も席について、コップを差し出し、

紗枝「私も一杯ちょうだい」

健介「あんたはあまり強くないから、ちよっ

とだよ」

紗枝「わかってるわよ。」

さあ鉄ちゃん、どうぞ召し上がれ」

健介「じゃ、乾杯」

三人唱和する。

亨「からあげおいしいね。僕毎日でもいい」

紗枝「何言ってるの。このごろ鶏も高いのよ」

健介「鉄ちゃん、会社のほうはどう？」

鉄男「ああ、言い忘れてた。」

俺、嵐山精機辞めました」

紗枝「ええっ！ 辞めてどうするの。」

いい会社だっていつも言ってたじゃない」

鉄男「そうなんだけど。」

俺 J A X A に就職したんだ」

紗枝「ジャクサって？」

健介「ええっ。あの J A X A ？」

紗枝「なんのこと？」

健介「日本宇宙開発機構のことだ」

鉄男「ほんとは宇宙航空研究開発機構ってい

うんだ。長ったらしいけどね」

紗枝「なんでまた！」

鉄男「いろいろあつてね」

健介「いやあ、これはすごい。

なかなか入れないんだよ、あそこは」

紗枝「なにがなんだかわかんない。私心配になつてきたわ」

健介「ふうーん。しかしめでたい、なあ亨」

亨「ワニのおじさんすごいね。JAXAだなんて」

紗枝「亨、あんた知ってんの？」

亨「テレビでやってたよ。

お母さん知らないの？

遅れてるう」

健介「心配しなくていいよ、最高の職場だから」

亨「鉄ちゃん、ロケットに乗るの？」

鉄男「さあ、どうかな」

亨「そのときは僕も連れてって」

紗枝「ダメなのわかってるでしょ、バカね。

ほんとはなにをするの？」

鉄男「さあ」

紗枝「さあじゃないでしょ」

鉄男「実は俺もわからない」

紗枝「頼りないのね」

鉄男「うん。頼りない」

一同笑ってしまう。

それからそれへと話は続き、楽しげに
食事は続いてゆく。

○玉井家近くの小さな公園（夜）

紗枝と鉄男が歩いてくる。

紗枝「話してなによ」

鉄男「うん」

紗枝「なんか話しにくいこと？」

鉄男「うん」

紗枝「でも、黙ってちゃ分からないわよ」

鉄男「そうだよな」

紗枝「そうよ、話しなさいよ」

鉄男「うん．．．」

姉ちゃん、俺、宇宙に行くんだ」

紗枝「宇宙！」

鉄男「マーズ7号って知ってる？」

紗枝「あの朝刊に載ってた、故障した宇宙船のこと？」

鉄男「そう。JAXAの人に頼まれて、7号を助けに行くんだ」

紗枝「助けるって、どうやって？」

鉄男「瞬間移動で」

紗枝「ああ・・・」

二人とも黙ってしまう。

紗枝「そんなことできるの？」

鉄男「さあ」

紗枝「宇宙って、危険なところでしょ？」

鉄男「まあ、そうだけど」

紗枝「やめるわけにはいかないの？」

鉄男「・・・」

紗枝「姉ちゃんは、行って欲しくない」

鉄男「でも、56人の命が懸かっている」

紗枝「それは分かるけど」

鉄男「普通のロケットで行っても追いつけな

いんだ。

こんなときこそ、俺の能力を使う時だと思
うんだ。

人に知られず、ひっそり生きてきたけど、
もうそれも限界だ。

なんか人のためになることをしたい。
助けられるかどうか分からないけど」

二人、また黙り込む。

紗枝「いいわ、行ってらっしゃい。

死んだ母さんも喜ぶわ」

鉄男「ありがとう。

それともう一つ。

このまま行ったら、もう帰ってこられない」

紗枝「え？」

鉄男「火星と地球が一番近くなるのは、今か
ら2年近く後だから、たとえ帰ってくる船
があっても2年後。

そんな船ないんだけど。

だから、無事火星に着けば、そのまま火星

で生きてゆくほかないんだ」

紗枝「もう帰ってこられないの？」

鉄男「うん」

紗枝の頬に一筋の涙。

紗枝「鉄ちゃん！」

泣きながら鉄男を抱きしめる紗枝。

鉄男も泣きながら、抱き返す。

鉄男「もう行かないと」

紗枝から離れる鉄男。

鉄男「これ」

と、小さな手提げ袋を渡す。

鉄男「さよなら、姉ちゃん。

いままでいろいろありがとう。

健介さんと亨ちゃんによろしくね」

紗枝「鉄ちゃん！」

泣き崩れる紗枝。

涙を拭いながら足早に去ってゆく鉄男。

○玉井家居間（夜）

奥の寝室で寝ている亨。

手で顔を覆って静かに泣き続ける紗枝。

健介、大きなため息をつく。

健介「そうか、今日はさよならを言いに来たんだね、鉄ちゃん」

机の上の紙袋を開く健介。

中から、母の、手のひらサイズの手元

供養用の骨壺の袱紗ふくさと、銀行通帳と、

印鑑とクレジットカード。

それから暗証番号の書かれた紙片。

JAXAの特別生命保険の証書。

そしてアパートの鍵。

さらに手紙が1通。

開いて、声に出して読む健介。

健介「お姉ちゃん。

今日から数えて1か月後。僕のアパートを

引き払って下さい。

なにも惜しいものはありませんから全部捨

ててください。

面倒ですがお願いします。

貯金は全部姉ちゃんにあげます。

（読み終えて）あいつ、死ぬ気・・・」

と言いかけて、紗枝のほうを見て口を
つぐむ健介。

静かに夜は更け行く。

○JAXA 筑波宇宙飛行士訓練棟減圧室（夜）

福井「鉄男君、どうだね、気分は」

鉄男「緊張してます」

福井「地球最後の風呂も入ったしね」

鉄男「もう、一生風呂には入れないんですね」

福井「うん。まあ、風呂に入らなくても生きて行けるから。」

山岳地帯に住む民族は、年に一回ぐらいしか風呂に入らないそうだけど、ちゃんと生活していける」

鉄男「そうですか」

福井「それからこの部屋は滅菌もやっている。

いかなるウイルスも船に持ち込まないた

め」

鉄男「福井さん、このマスクは？」

福井「寝るときにそのマスクで酸素だけを呼吸して、体から窒素を追い出す。

そしてこの気密室の気圧を、徐々に0.7にする。

その状態を翌朝2時まで保つ。

朝2時になったら、トイレ・食事を済ませる。

それからここに一緒に泊る町田君が、君に宇宙服を着せてくれる。

それから、宇宙服の気圧を、1時間かけて0.3にしてゆく。

それでおしまいだ」

鉄男「宇宙服を着るのに、そんなにかかるとですか」

福井「うん。きみの安全のためだ」

鉄男「映画で見ていると、宇宙服を着てすぐに船外活動するようですけど」

福井「そりゃあ、映画だから」

鉄男「そうなんですか」

福井「うん、そうなんだ。」

じゃ、町田君、後は頼むよ」

町田「はい、わかりました」

福井、部屋を出てゆく。

町田「これから長い夜が始まるけど、ゆっくりしてね」

うなずく鉄男。

町田「あ、それから、冷蔵庫の中にオレンジジュースが入っているから。

宇宙船には酒や炭酸飲料は、持ち込み禁止なの。」

鉄男「そうなんですか」

町田「お酒は気圧が下がると悪酔いするから」

町田、アコーディオン・カーテンの向こうに。

鉄男、缶を開けて飲み始める。

しばらくしてかすかな声で歌い始める。

「むかしの夢の なつかしく

尋ね来たりし 信濃路の

山よ小川よ また森よ

姿、昔のままなれど

なぜに かの君 影もなし」

歌・高原の旅愁

こうして歌は続いてゆき、鉄男は目に
うっすら涙を浮かべながら、小さな声
で歌ってゆく。

曲が終わって、鉄男涙を拭う。

鉄男 M 「お母さん、本当にさようなら」

町田。部屋に入ってくる。

町田「驚いたわね。こんな大昔の歌を知って
るなんて」

鉄男「亡くなった母は、古い歌が好きで、い
つも口ずさんでいました。

そのせいで、私も好きになりました。

歌うたびに母が思い出されます」

町田「そう。美しい歌ね」

鉄男「ええ」

○同（朝）

ポロシャツとスラックス姿の鉄男。

アコーデイオン・カーテンを開けて

町田が出てくる。

町田「おはよう」

鉄男「おはようございます」

町田「どう？ よく眠れた？」

鉄男「ええ」

町田「トイレ、もういいわね？」

鉄男「はい」

町田「酸素マスクを外して。」

それから、この台に登って」

そこには宇宙服と、そのちよつと上に

鉄棒、後ろに踏み台。

鉄男、踏み台に上がる。

町田「その鉄棒を掴んで、両足を宇宙服に入
れて」

言われるままに宇宙服の中に滑り込む。

町田、鉄男の首に5センチ幅の帯を巻

きつけ、それから伸びたイヤホンを鉄

男の耳に。

町田「これは自動翻訳器。

君に話しかける人の言葉を判別して、自動で日本語にして、イヤホンに流すの。

君が日本語で話すと、相手の国語に変換して、のどのスピーカーから音声を再生。

一つ気を付けることは、大きな声で話さないこと。

大きな声だと、例えば日本語と英語が同時に出てくるから、相手が混乱するの」

鉄男「ああ、なるほど」

町田がヘルメットを被せ、固定する。

町田「呼吸はその中のマスクでね」

マスクが鉄男の鼻から口を覆う。

町田「今から、宇宙服の気圧を〇に落とし ていきます。

その椅子に座って楽にしているね。

なにかあったら声をかけてね」

○ J A X A 宇宙飛行士訓練棟・屋上（早朝）

ほの暗い空。

屋上の扉から、福井と町田に付き添わ

れて、宇宙服を着た鉄男、電動カートに立ったまま乗って出てくる。

福井「もうすぐ8号が右から登ってくる。

訓練のタイミングを思い出してテレポートするんだよ。

失敗したら、ここへ戻ってくればいいから」

鉄男「はい。だいじょうぶです」

町田「無理するんじゃないわよ。

わかった？」

鉄男うなずく。

福井「あ、それからね、さっき連絡があったんだけど、8号にはすでに3人乗組員がいるんだそうだ」

鉄男「え、そうですか。

それは心強いなあ。

どんな人たちですか？」

福井「いやあ、短い通信だったからそこまでは分からない」

町田「あ、登ってきた」

薄明るくなりつつある夜明けの空を背

景に銀色に光る2つの点。

ISS2とマーズ8号が山々の間から

ゆっくり移動。

角度が80度ぐらいになったとき

福井「今だ！」

鉄男の姿は消える。

○地上380Km上空（朝）

鉄男忽然と現れる。

そしてすぐに落下し始める。

右上空に8号の姿が。

鉄男、再びテレポルト。

○地上390Km上空（朝）

鉄男の横を巨大な8号が高速で通り

過ぎようとする。

鉄男「秒速8キロ！」

鉄男、さらに8号を追いかけてテレ

ポルト。

○地上400Km上空（朝）

一瞬、8号の先端のエアロックを確
認して再びレポート。

エアロックの前に近づいた鉄男。

鉄男「今だ！」

鉄男、消える。

○マーズ8号のエアロックの中（朝）

現れた鉄男、激しく壁に背中から激突。

呼吸が出来ない。

目の前が暗くなる。

そして失神。

3時間後、目を開く鉄男。

体を起そうとして、背中に激痛が。

それでも我慢して、泳いでエアロック
の入り口に。

緑に光る大きなボタンを叩く。

するとスライド・ドアが開く。

○エアロックの外（朝）

エアロックのボタンを押して閉じる。

鉄男、痛みを堪えて鉄棒の前に来る。

練習通り宇宙服を脱ぎ、並んでいる宇

宙服のそばに置く。

そばにあったスキッパーシューズを履

き、操縦室へと続く筒状の通路を泳ぐ。

○マーズ8号操縦室（朝）

ステファニー・ミラン（32）が操作

卓の前に。

空気の流れて誰かが下りてくるのがわ

かる。

彼女の髪の毛がそよぐ。

ステフ「ジョンなの？」

鉄男泳ぎ出る。

鉄男「こんにちは」

ステフ「何言ってるの。おかしいんじゃない？

ジョン」

と言って振り向くと鉄男の姿が。

ステフ、席を離れてシート影へ。

ステフ「だ、誰なの！」

鉄男「はじめまして」

ステフ「なに？ どこから来たの！」

鉄男「地球から来ました」

ステフ「あなた、誰？」

鉄男「申し遅れました。鉄男と申します」

ステフ「テツツオ？」

ヒューズトンから連絡のあった、あなたが

テツツオ？」

鉄男「そのようです」

ステフ「うそ、信じられない！」

鉄男「その気持ちはわかります」

ステフ「どうやって来たの？」

鉄男「宇宙服を着て」

ステフ「ロケットは？」

鉄男「使いませんでした」

ステフ「テレポーション！」

鉄男「そうです」

ステフ「ほんとだったんだ！」

そのとき、鉄男の背中が壁に触る。

鉄男「うっ」

ステフ「どうしたの？」

鉄男「エアロックで壁にぶち当たってしまいました」

ステフ、鉄男のそばへ泳いできて、

彼のポロシャツをめくりあげる。

背中が赤くなっている。

ステフ、そっと触ってみる。

鉄男、うめく。

ステフ「たいへん！ ホイールに降りましよう」

鉄男の腕を掴んで、壁のスポーク入口に連れてくる。

足から彼を入れ、支持金具を掴ませる。

自分もその傍に入る。

ステフ、ベルト駆動スイッチを入れる。

ステフ「あなた、なんかいい匂いがするわね」

鉄男「え、ああ、こちらに来る前に風呂に入ってきましたから」

ステフ「風呂！ いいわね。

風呂だって。

風呂にはいれるなら1万ドル出してもいいわ」

鉄男「はあ」

ステフ「私、なにか臭うでしょ」

鉄男「いいえ、なにも」

ステフ「うそ、4年も風呂に入っていないのよ」

鉄男「しいて言えば、花の香り……」

ステフ「あなた、優しいのね」

顔を赤らめる鉄男。

○スポーク内（朝）

二人の体は、徐々に下に押し付けられ、人口重力が効いてくる。

ステフ「回転するホイールの中は、火星と同じ重力で、地球の1／3」

ものの2分もしないうちに、カーブしたスポーク内側の扉がスライドして開く。

○回転ホイール・医務室（朝）

ステフ、鉄男を背もたれの無い椅子に座らせ、超音波診断装置と触診で診断を続ける。

ステフ「骨は折れてないから打ち身ね。

炎症用の軟膏を塗るわ」

壁の棚からチューブを取り出し、裸の

鉄男の背中に塗る。

うめく鉄男。

ステフ「この痛み止めを飲んで」

錠剤とチューブの水を渡す。

鉄男、薬を飲み、チューブの水を全部飲み干す。

ステフ「遅くなっただけど、自己紹介。

この船のゼネラルドクターの、ステファニー・ミラン。

ステフって呼んで」

鉄男「ゼネラルドクターってなんですか？
聞いたことないけど」

ステフ「一つの宇宙船に、外科医や内科医、
婦人科医、整形外科医なんかたくさん乗せ
るわけにはいかないの。

だから主な病気や疾患を一人で診断治療す
る医者が必要なの。

それがゼネラルドクター」

鉄男「へえ、頭がいいんですね、あなたは」

ステフ「そうよ、私は頭がいいの」

と笑う。

ステフ「さてと、今何時？」

壁の時計を見る。

ステフ「6時すぎ。

みんな起きてるころね。

行きましょう。

みんなを紹介するわ。

あ、その前に、今から行くルームAに、私
の娘キャリー（3）がいるの。

その子が（あなたは私の父ちゃん？）て
聞いたら、そうだと言って欲しいの。

訳はあとで説明するから。

お願いね」

鉄男、訳が分からず返事が出来ない。

二人は、資材庫を通り過ぎ、ルームAに入る。

○回転ホイール・ルームA（朝）

ステフと鉄男入ってくる。

部屋の床は薄い緑色。

上下2段、左右3連のベッドルームのその前に、固定された横長のテーブルと椅子が12脚。

そこに少女とアフリカ系の老人が座っている。

予想と外れた乗組員の構成に驚く鉄男。

キャリー・ミラン（3）「ママ、そのひとだれ？」

鉄男「こんにちは」

キャリー「あっ、あなた私のダディでしょう？」

ねえ、そうでしょ？」

ステフ、肘で鉄男の脇腹をつつく。

鉄男、痛さに顔をしかめながら

鉄男「そうだよ。私が君のダディだ」

キャリー「わーい。ダディだ、ダディだ！」

椅子から立ち上がり、鉄男に抱きつ

く。

鉄男、たじたじとなる。

ジョン・ダーウエル（76）「この人は？」

ステフ「テッツオさん。」

昨日連絡のあったテレポーター・ジョン・マ
ン。

テッツオさん、この人はジョン・ダーウエ
ル」

ジョン「ほう、ほんとだったんだね。」

いや、驚いた！」

ステフ「テッツオはエアロックで怪我をした
けど、大丈夫、手当てしたから。」

さっきの薬、睡眠作用があるから、少し
横になって、休んでね」

ステフ、下のベットのドアを開き、

鉄男に中に入るよう促す。

中は大人2人がゆっくり寝られる広さと、楽に座ることのできる高さ。

鉄男、そこに下向きに横たわる。

ベッドのドアを閉じるステフ。

キャリアー「つまんない、ダディ寝ちゃって」

ステフ「無理言わないの。

ちよつと寝たら起きるから。

私、ヒューストンに連絡してくる」

と立ち上がり、スポークのほうへ。

○ 操縦室

ステフ、通信機のスイッチを入れる。

モニターにミッジョン・コントロー

ル・センターの全景が。

そしてマクニールが画面右から入り込

む。

マクニール「How did it go?

Did he arrive?」

字幕（どうだった？

彼は到着したかね？）

ステフ「Yes, he showed up just now.

字幕「はい、さっき現れました」

マクニール「Wow, it was true.

I was actually skeptical.」

字幕（いやあ、ほんとだったんだね。

実は半信半疑だったんだ）

ステフ「I was surprised too.

I thought it was a Houstons joke」

字幕（私も驚きました。

てっきりヒューストンのジョークだと）

マクニール「Then tomorrow morning,

let him teleport to the moon.

Report back to me.」

字幕（じゃあ、明日、月までレポートを

せてくれ。

報告を頼む）

ステフ「Yes' Ser

Now then, here we go.」

字幕（はい、じゃあこれぞ）

〇ルームA（夜）

4人がテーブルを囲んでいる。

食べ物は、ラッピングされたり、チュ
ーブに入っているもの。

鉄男、はさみでラップを切り、中の、
さばの味噌煮を、箸でつつく。

続いて開いた白米のパックから一口。
そばには、カップに入ったほうれん草
とわかめのスープ。

ステフ「それにしてもよく寝たわね、10時
間」

鉄男「ええ、薬が効きました。

痛みもほとんど収まりました」

キャリー「ダディ、これ食べる？」

鉄男「キャリーちゃんは優しいね。

それはなに？」

キャリー「ブリトーよ。

知らないの？」

鉄男「ああ、ブリトーね。

聞いたことあるけど、食べたことないな。

おいしいの？」

キャリアー「ママ、おいしいかだって。

おかしいね」

ステフ「そうね、おかしいわ」

ジョン「君はイタリア人なのに日本食が好き
なのか？」

鉄男「なんで私がイタリア人？」

ジョン「だって、テツツオってイタリアっぽ
いから」

鉄男「正しくは、テツツオじゃなくて、テ・
ツ・オです。

私は日本人です。

日本人の名前はほんとは一字づつ意味があ
るんです。

私の名前のテツは、金属の鉄。

オは男のこと。

英語に直訳すればアイアンマン」

キャリアー「ママ、アイアンマンだって」

ジョン「そうか、君がアイアンマンか。

これからそう呼ぼう」

キャリー「アイアンマン、アイアンマン！」

鉄男「やめてください。

テツオのほうがましです」

キャリーが鉄男にウイंकする。

鉄男もウイंकを返す。

キャリーがキャツ、キャと笑う。

ステフ「キャリー、歯を磨いてね」

キャリー「うん」

キャリー、歯磨きペーストのついてい

ない歯ブラシで歯を磨き始める。

磨き終わると、コップ一杯の水を飲む。

そしてキャリーは、寝室のドアを押

し開き中へ。

続いて、リモコンで正面のモニターの

電源を入れる。

慣れたもので、ライブラリーからアニ

メーションを選び、再生する。

ステフ「音が大きいわよ」

キャリー「はい」

鉄男、お茶をチューブから飲む。

鉄男「あの、最初皆さんに会ったとき、びっくりしました」

ステフ「なんで？」

鉄男「乗組員3名と聞いていたので、屈強な男性3名だと思い込んでいました。

ところが、来てみると女性と子供と老人……、あ、すみません、壮年の人だったんで。

一番ありそうにないパターンだから」

ジョン「そうだな。

理由を知らないと驚くよなあ」

ステフ「ジョンは最初から8号の火星移住者に登録してたの。

ところがマーズ8号の出発が中止になって」

ジョン「もうすでに8号に乗り組んでいたから、2年先までここで暮らすことになってね」

ステフ「ISSってやっぱり手狭なの。

それに、ここにはありがたい重力もあるし」

鉄男「ダーウエルさん」

ジョン「ジョンでいいよ」

鉄男「じゃジョン、あなたはなぜ火星に」

ステフ「あなた、知らないの？」

この人がコズミック・フード・サプライの
元CEOだってことを」

鉄男「あ、思い出した。」

どっかで見た顔だと思ったら。

そうだ、そうでしたよね。

でもなんで火星なんか」

ジョン「火星での食料生産って、ほんとに大
変なんだよ。」

それで私は興味を持って。

ほんとは若い夫婦しか乗船できないんだけ
ど、NASAにすごい献金したからね」

ステフ「そうよね。金の力はすごいわね」

鉄男「へえ。」

で、ミランさんは？」

ステフ「私の話は（ささやき声で）キャリー
のいないときに」

キャリー「なにか言った？」

ステフ「何でもないわ。

（ささやき声で）ほんとに耳がいいんだから」

3人、笑ってしまう。

○鉄男のベッドルーム（朝）

クラシック音楽が静かに流れ始め、

鉄男目覚める。

コンコンとノックする音。

キャリー「Daddy, wake up.

It's morning.」

字幕（ダディ、起きなさい、朝よ）

鉄男「えっ」

鉄男、自分がどこにいるのか、一瞬間
惑う。

やっと気づいて、翻訳器を首にかけ、
寝室のドアを開く。

キャリーがのぞき込んで笑いかける。

キャリー「朝よ。早く起きないと」

鉄男「ああ、おはよう」

キャリー「さあ、早く！」

寢室から出ると、ほかの2人はもう起きています。

鉄男「えっ、今何時ですか」

ステフ「ISS標準時で朝6時」

鉄男「ああ、そうですか。」

なにか、時間がよく分からない」

ジョン「宇宙へ来ると、みんなそうなる。」

だいたい朝日が差してこないからね。」

第一この宇宙船には窓がない」

ステフ「さあ、体操よ」

鉄男「はあ」

曲が流れ始め、3人が体操を始める。

鉄男も真似して始める。

日本のラジオ体操に似た部分もあるが、

太極拳そっくりの、ゆっくりな動作が

多い。

10分くらいで終わる。

鉄男「朝必ずやるんですか」

ステフ「そう、生活リズムを維持するためよ。」

ところでテツツオ、朝食はなにが食べた
い？」

鉄男「ああ、何でもいいですが・・・。

でも、みそ汁とおにぎり焼鮭があれば」

ステフ「そう」

ステフ、隣の資材庫へ入ってゆき、ト
レイにいろいろな食材を乗せて戻って
くる。

見ると、3人は、ラップされた容器に
コーンフレークを入れ、そこに水で溶
いた粉末ミルクを注ぎ、副菜に野菜の
ソテーとハム。

鉄男「へえっ、ずいぶん軽いですね」

ステフ「あのね、宇宙では運動量が少ないか
ら食べ過ぎは禁物。

かと言って、食べないと、急激に体が衰え
るの。

つまり、量より質ね」

鉄男「へえ、じゃ、この私の食事は・・・」

ステフ「あなたは別。

しっかり食べてね」

3人、食事を始める。

ステフ「テツツオ、歯も磨いたわね。

さあ、歩きましょう。

リンカーン、ホイールのすべての部屋の隔壁を開いて」

瞬時に部屋の前後のドアが開く。

ステフ「あ、リンカーンっていうのは、この船の人工知能」

キャリー「私、ダディと手をつなぐ」

と言って、鉄男の手を取る。

ステフ「これも日常リズムの一環。

低重力だから、決して走ってはダメよ。

ホイール一周350mで6周、約2Km。

ほんとはその倍は歩きたいけど、キャリーのことを考えて、しばらくはこのペースで」

こうして4人はゆっくりと歩き続ける。

居室ごとに床の色が違って、虹の7色

に塗り分けられている。

ステフとキャリー、歌を歌い始める。

4周半ばで、キャリーがむずかる。

キャリー「ママ、もう歩けないよ」

ステフ「まあ、困ったわね」

鉄男「私がおんぶしましょう」

ステフ「そんなの悪いわ」

鉄男「いや、大丈夫です」

キャリー、ダディの背中に乗って」

キャリー「(ニコニコと)はーい」

キャリーは鉄男の背中に乗って体を上

下させる。

鉄男「そんなに動いたら危ないよ」

おとなしく乗ってなさい」

ステフ「そうよ、ダディの言うこと聞かなく

っちゃ。

わかった？」

キャリー「うん」

それでも体をゆするキャリー。

そして彼女の体が鉄男の手をすり抜け

下へ。

咄嗟にキャリーは鉄男のスラックスを
掴む。

そのため、ブリーフごとスラックスが
脱げて、お尻が少し見える程に。

気付いた鉄男はすぐスラックスを
持ち上げる。

鉄男「キャリー、なんともない？」

ステフとジョンはクスクス笑い。

そのうちこれが大笑いになって、笑い
が止まらない、

鉄男「なんですか。

何がおかしいんですか？」

それが笑いを煽り、キャリーもなんだ
かわからずに笑い始める。

鉄男もつられて笑い出す。

キャリーを今度は前で抱き、

鉄男「困った人たちだなあ」

ジョン「宇宙に来てこんなに笑ったのは
初めてだ」

○着陸船の操縦室（朝）

ステフ「さて、テツツオ、テレポーターシヨンの能力を見せてもらいましょうか」

鉄男「どうやるんですか？」

ステフ「その真ん中の操縦席に座って」

いわれるままに座る鉄男。

ステフ、鉄男のシートベルトを締める。

ステフ「右の席に座って、ジョン」

ジョン「おう」

ステフ「キャリアー、あなたはダディの横」

キャリアー「うん」

その横にステフが座る。

全員シートベルトを締め終わる。

ステフ「リンカーン、正面のモニターにカメラに映った月を表示して」

大きなスクリーンに真っ暗な宇宙が広が
り、真ん中に月が。

ほとんど地上で見ている大きさ。

そして画面の下に、なにやら鋭いもの

が写っている。

鉄男「あの尖がったものはなんですか？」

ジョン「あれはマーズ8号の先端部分。

この映像は、我々の真上に取り付けられた
カメラで撮影している」

ステフ「マクニール博士によると、あなたは
月まで跳べるそうね」

鉄男「さあ」

ジョン「地上から8号まで跳べたのだから、
可能性はある」

ステフ「とにかくやってみて。

遅れると、月が視界から消えてしまう。

なにしろ、地球も月もこの船も、みんな動
いているから」

鉄男「・・・、はい。

あの、手をつないでもらえませんか。

テレポーター・シヨンを確実にするために」

4人隣り合って手をつなぐ。

ジョンとステフは、一方の手で座席の
アームをしっかりと掴む。

鉄男、心を静めて月に意識を集中する。
右に少しずつ移動する月。
静まり返る機内。

鉄男、月が移動したあとの空間に意識を集中。

鉄男、空間を折り曲げて月を引き寄せ
る。

次の瞬間、スクリーン右半分に月の表面が大きく表示される。

ステフ「リンカーン、月の画像を拡大したの？」

リンカーン「いいえ。そこに見えているのはカメラからの実画像です」

ジョン「ええ？」

ステフ「やった！ やったのよ！」

キャリー「ママ、なんのこと？」

ステフ「あれはね、ほんとお月様。

やってきたのよ、月まで」

ジョン「驚いたな！ こんな事があるなんて」
ステフ「テツツオ！ よくやったわ。」

え？ どうしたのテツツオ」

鉄男、首を座席の後ろに大きくのけぞらし、荒い息をしている。

顔が赤い。

ステフ、ベルトを解除して鉄男を持ち上げる。

額に手を当てる。

ステフ「まあ、たいへんな熱！」

ジョン「どうしたんだ」

ステフ「なにかおかしいの。」

手伝って、ジョン。

部屋まで運ぶから」

ジョン「わかった」

鉄男の体は宙に浮く。

その体を引っ張って居住区へのスポー

ク入口へ。

後ろをついてゆくキャリアー。

○ホイール・医務室

ステフとジョン、鉄男をベッドに横た

える。

キャリー「ダディどうしたの？」

ステフ「あのね、ちよつと病気なの。

その椅子に座っていてね」

キャリー「うん」

ステフ、診療を始める。

ジョン「ちよつと気になることがあるから」

ステフ「え？」

ジョン「ちよつとね」

といいながら、部屋を出てゆく。

しばらくして鉄男、気が付き、周りを

見回す。

ステフ「あ、気が付いたのね、よかった」

鉄男「一体どうしたんですか？」

ステフ「あなた、気を失っていたのよ」

キャリー「ダディが起きた！」

ステフ「テツツオ、動かないでね。

あなた、熱が出て、脱水症状なの。

今、点滴しているから。

それからこれが解熱剤」

と点滴チューブを連結する。

鉄男「今まで倒れたことないのに」

ステフ「それほどテレポーターションって、

エネルギーを使うものらしいわ。

しばらくそのまま置いてね」

鉄男「それでテレポートできたんですか？」

ステフ「左のモニターを御覧なさい」

鉄男、モニターを見やり

鉄男「あ、月！」

ステフ「成功よ。

だけどね、医者立場から言うと、もう少し調べてでないと、続けることはできないわ。

結果が出るまで安静にね」

キャリアー、心配そうに鉄男の手を握る。

ステフ「キャリアー看護師さん、

ダイをよく見ていてね。

ママ、お仕事があるの」

キャリアー「はい」

ステフ、部屋を出てゆく。

○ 操縦室

ジョンがモニターを見ながら考え込んでいる。

いろいろな数式が。

泳いでくるステフ。

ジョン「How was it?」

字幕（どうだった？）

ステフ「Just realized.

But he still have a fever.」

字幕（気が付いたけど、まだ熱があるの）

ジョン「Heh」

字幕（ふーん）

ステフ、通信機の電源を入れる。

ステフ「Houston, Houston, over here.

Mars 8, come in.」

字幕（ヒューストン、ヒューストン、こちら
マーズ8号、どうぞ）

しばらくしてモニターにマクニールの

顔が。

マクニール「This is Houston.

You made it to the moon!

Thank God! 」

字幕（こちらヒューストン。

月まで行ったね！ よかった！ ）

ステフ「We was successful,

but Tethuo... collapsed.

He is now undergoing treatment. 」

字幕（成功はしたんですけど、テッツオが

倒れてしまいました。

今治療中です）

マクニール「Well, that's worrying.」

字幕（ああ、それは心配だ）

ステフ「So, while he's resting, we want

to move Mars8 while he rests. Over」

字幕（それで、彼が休んでいる間、8号

を火星へ移動させたいんですけど、どうぞ）

マクニール「Yes, let's do that.

I'll have Lincoln program the plasma beam

to fire and receive immediately.

You don't have to do anything. Over」

字幕 「そうしよう。

プラズマエンジンの駆動をリンカーンにす
ぐプログラムさせる。

そちらは何もしなくていい、どうぞ」

ステフ 「I understand.

I will contact you again if there is any
change in him. Over」

字幕 （わかりました。

彼に変化があったらまた連絡します。

連絡終わります）

マクニール 「Copy that. Communication
complete.」

字幕 （了解。通信完了）

モニターが消える。

ステフ 「What are you doing, John? 」

字幕 （なにしてるの、ジョン）

ジョン 「I'm not sure.

I'll let you know when I do.”」

字幕（よく分からないんだ。

分かっただら教えるよ）

首をかしげるステフ。

○回転ホイール・ルームA（朝）

4人は朝食を終え、お茶を飲んでいる。

ステフ「テツツオ、今日はどう？」

鉄男「ええ、まあ、何とか」

ジョン「何とかじゃあ心配だなあ」

キャリー「大丈夫よ、ダディには私がついて

るから心配しないで」

ステフ「それは心強いわ。

今日は歩くの止める？」

鉄男「いや、歩きましょう。

そのほうがいい」

○操縦室（朝）

操縦席の鉄男。

彼の頭に柔らかいゴムのようなキャツ

プを被せるステフ。

そして彼の額や頬に手を当てる。

ステフ「このヘッドキャップは頭の冷却用。

一緒に脳の血流も調べます。

昨日のことで心配になって用意したの」

鉄男「ありがとうございます」

ステフ「さあ、今日は・・・」

鉄男「リンカーン、モニターに、火星までの軌道を。」

それから赤緯と赤経をワイヤー表示して」

星々の間を遠くに伸びた赤い線と、細

い縦横のワイヤーが描かれる。

鉄男「その赤い線の先端が火星？」

リンカーン「はい」

鉄男「上のほうに光っているのは、みずがめ

座のサダルスード？」

リンカーン「はい」

鉄男「下のほうの明るい星はクジラ座のデネ

ブカイトス」

ジョン「星座のこと、よく知ってるね」

鉄男「これが私の趣味ですから」

ステフ「大学で勉強したの？」

鉄男「いえ、私は高校しか出ていません」

ステフ「へえ」

鉄男「これで大まかな位置がわかりました。

それでは、ここから385000Kmの7

号軌道の上に、昨日の月の画像を同じ大きさ

で表示して」

リンカーン「はい」

鉄男「じゃ、昨日と同じだけテレポートして

みます。

あの感覚は覚えていますから」

ステフ「みんな、ベルトをもう一度確かめて」

鉄男「じゃ」

静かな時間が流れる。

直ちにモニター上の月が消える。

ジョン「成功？」

ステフ「そのようね。」

後ろの画像を見てください」

ステフ、カメラの切り替えノブを。

モニターには影になった月が、

太陽の後光を浴びてリング状に。

ステフ「月の裏側が見えてる。成功ね。

テツツオ、大丈夫？」

鉄男「ええ」

ステフ「じゃ、みんな部屋へ行って休んで。

私は今から、ヒューストーンに連絡を取るから」

鉄男、ベルトを解いて離れようとする
と、よろける。

ステフ「大丈夫？」

鉄男「ええ」

ステフ「ジョン、テツツオにタンパク質とビ
タミン類をたくさん摂らせて」

ジョン「まだ朝9時だけど」

ステフ「この人は、1日5回食事しないと
いけないみたい。

昨日の検査でアミノ酸が大量に失われてい
たの」

ジョン「わかった」

ステフ「キャリアー、あなたもダディの世話を

してね。ママはお仕事があるの」

キャリアー「うん」

3人、操縦室を出てゆく。

○ホイール・ルームA

鉄男、ポリエチレンに包装されたスクランブル・エッグとベーコンと粉末牛乳を水で溶いたものをたいたらげる。

ジョン「さあ、ビタミンたっぷりの野菜ジュ

ース」

鉄男「ありがとうございます」

そばでキャリアーがあきれ顔で見つめて
いる。

キャリアー「ダディ、そんなに食べてお腹痛く

ならない？」

鉄男「さあ」

ジョン「ダディはね、さっき大仕事をしたから、とてもお腹が減ってるんだよ」

キャリアー「座っていただけで何もしていないよ」

ジョン「そうだ、そうだよね」

鉄男「ごちそうさまでした。ちよつと横にな
ってきます」

ジョン「ああ、そうするといい」

キャリー「私が歌を歌ってあげる」

と、鉄男の手を引いてベッドのほうへ。

ベッドに横になり目を閉じる鉄男。

キャリー、ベッドにもぐりこんで、

鉄男の耳元で歌い始める。

歌は *wheel on the bus*

キャリー「The wheels on the bus go round
and round

Round and round, round and round

The wheels on the bus go round and round

All through the town

All through the town . . .」

そうしているうちに二人とも寝てし
まう。

しばらくしてステフ帰ってくる。

ステフ「Whats? Where's Carrier?」

字幕 (え? キャリーは?)

ジョン「They're both sleeping.」

字幕 (二人とも寝ているよ)

ステフ、ベッドの扉を開く

と、二人とも身を寄せ合って寝ている。

ステフ「Okay, me too.」

字幕 (じゃ、私も)

と、キャリーの横へ潜り込む。

ジョン「what the hell!」

字幕「なんてこった!」

1時間ほどして、鉄男目を覚ます。

横を見て、キャリーとステフが一緒に

寝ているのを見て驚く。

鉄男「え?」

ステフ、目を覚ます。

ステフ「おはよう」

鉄男「あ」

ステフ「あなたに最初会ったとき、キャリーの
ダイだと言わせたこと、謝るわ。」

この子のダディは、ISSで私と恋愛の末、帰還船で地球に帰ってしまったて、そのあと妊娠がわかって・・・」

鉄男「宇宙での出産って、初めて？」

ステフ「そう、馬鹿な妊婦第一号よ」

鉄男「次の帰還船で地球に帰ればよかったのに」

ステフ「そのとき帰還船の出発はずーっと先。

妊娠中、一番こわいのは宇宙放射線。

ISSで、もう十分浴びていたの。

それを避けられるマーズ5号が出発間近だったのだから、それに乗せてもらったの。

そうして5号が火星に出発して190日に生まれたの。

結局、キャリーの体が着陸に耐えられるまで、マーズ号で生活することになったの。マーズ5号で1往復、合計3年近く生活してきたわ」

鉄男「でも、マーズ号は地球に帰るときは、誰も載っていないでしょう？」

ステフ「そうよ。

私とキャリアだけ」

鉄男「食料や水はもう残っていなかったんじゃないですか？」

ステフ「いいえ、最悪の状況を考えて、1年2か月の備蓄は用意されていたの」

鉄男「寂しくなかったですか？」

ステフ「ええ、着陸船が火星に向かってしまつと、ほんとに寂しかった。

最初、気が狂うのかと思つたけど、慣れてくると、なんとか耐えられるものよ。

キャリアの世話もあつたし、ヒューストンとの連絡事務も。

それから退屈しのぎにコンピューターと会話したり、映画を見たり、本を読んだり」

鉄男「あなた、強いですね」

ステフ「私は我慢できても、キャリアは、そうはいかなかったわ。

2歳ぐらいになると映画に出てくるお父さんや兄弟のことが気にかかつて。

それで物心がつき始めたころから（私の
デイは？）って尋ね始めて・・・」

鉄男「そうでしたか。

それなら、しばらくダデイでいましょう」

ステフ「そうしてくれる？

そうならありがたいわ」

鉄男「地球に帰るにはどのくらい時間が」

ステフ「地球に無事着陸しても、骨や筋肉が

弱いから、この子はたぶん歩くことができ

ない。

ほら、足もこんなに細い」

キャリーのスラックスをめぐり上げる。

ステフ「だから一生ベッドで暮らすことにな
る。

それだったら、重力の少ない火星のほう

が・・・」

鉄男「よくわかりました。

いい判断だと思います」

ステフ「その代わりと言ったら変だけど、こ

の子、3歳なのに、知能は6歳くらい」

キャリアー「うーん」

ステフ「あ、起きたのね。

今日のお勉強がまだよ。

始めましょう」

そのとき、スピーカーからリンカーンの声が。

リンカーン「ヒューストンからの緊急連絡です」

ステフ「なにかしら？」

○ 操縦室

4人がスポークから出てきて座席に座る。

ステフ、通信スイッチを入れる。

モニターに、ミッション・コントロールセンターを背景に、マクニールが現れる。

マクニール「やあ、驚かせてすまない。

懸案事項が現実になったんで呼び出した」

ステフ「懸案事項って」

マクニール「最初から説明しよう。

鉄男さんのテレポーターションをNASAで議論にかけたとき、最初誰も信じてくれなかった。

それでもあのC130のテレポートのセルラーフォン録画を見せて、なんとか……。そして昨日の月までのテレポートでみんな納得がいったんだが、しかし別の問題が」

ステフ「別の問題って」

マクニール「それは、テレポーターション先の、位置の正確さなんだ。

鉄男さんはコンピューターじゃないから、厳密なジャンプは出来ない。

昨日の月までのテレポートでは、月からは、300Km離れていた。

月に激突を避けたと思えば、まあ範囲内と言える。

しかし、今朝のジャンプでは、距離は合格だったが、位置は大分ずれていた。

ずれているのは、姿勢コントロールエンジ

ンで補正が効くが、スタッフの中から、毎日エンジンをふかすと、燃料が足りなくなるという指摘が出てきた。

これはそのとおりなんだ。

それで、お願いなんだが、鉄男さん。

宇宙船の姿勢制御もエンジンを使わずに君のテレポーターションでできないか？」

鉄男「物を動かすのは楽ですが、しかし、

正確になると・・・」

マクニール「こちらのスタッフが、そのプログラムを組み立てた。

それは、補給船がドッキングするときの、昔の二重像合致式の視覚誘導なんだ。

いまからモニターにそれを表示する」

モニターに進行方向の星空が。

その上に、細い大きな赤い十字が、マ

ーズ8号の先端に重なって表示され、

さらに別の位置に緑の十字が。

マクニール「赤い十字が現在の位置。

緑の十字が、火星への軌道の正しい向き。

鉄男さん、目の前の固定された操縦桿に手を添えて、機体の赤十字を緑十字に重ねてみて欲しい」

鉄男「これってずいぶんアナログですね」

マクニール「テレポーション自体がアナログだよ」

鉄男「そりゃあそうですけど」

マクニール「とりあえずやってみてくれ」

ステフ、鉄男のシートベルトをきつく

締める。

一回目、近くはなるが重ならない。

二回目、かえって下へ下がりがすぎる。

三回目、縦は揃ったが横がずれる。

鉄男「難しい」

ジョン「みんなが見ていると気が散るから、

ステフ、キャリーと一緒にホイールへ戻ったほうがいい。

このくらいの修正は全員いなくてもいいようだ」

ステフ「そうね、そうするわ。」

テツツオ、深呼吸してね」

鉄男「うん、ありがとう」

ステフ、キャリーを連れてスポークへ。

ジョン「これで気持ちが悪くなっただろう。

君はステフの前では緊張しまくりだから」

鉄男「え？」

ジョン「集中、集中」

こうして小一時間作業が続く。

鉄男「重なった！」

ジョン「おお！」

マクニール「成功したね。

これであとプラズマビームエンジンで軌道
に戻る！」

鉄男さん、ありがとう。

これがだめなら、そこから地球への帰還命
令を出すところだった・

ほんとに良かった。

これから毎回レポートした1時間後新し
い軌道計算に基づいて、姿勢コントロール
をやって欲しい」

鉄男「わかりました」

○ホイール・ルームC（夜）

ジョンがケースの中のレタスの世話を。

横で見ている鉄男。

ジョン「テツツオ、サプライズがある」

と、ポケットの中から金属製の容器を
取り出す。

ジョン「おいを嗅いでご覧」

テツツオ、容器のふたを取りにおいを
嗅ぐ。

鉄男「あ、ウイスキー！」

ジョン「ちよつと一杯やろう」

鉄男「でも、これは禁制品では・・・」

ジョン「私がNASAに献金した見返りさ」

鉄男「へえ」

ジョン、隠し持っていた紙コップにワ
ンフィンガーづつ注ぐ。

ジョン「ストレートでいくかい？」

鉄男「水割りがいい」

ジョン、やはりポケットの水のチューブを取り出し、鉄男に渡す。

チューブの水をコップに注ぐ鉄男。

ジョン「君のテレポーターシヨンに乾杯」

鉄男「あなたのレタスに乾杯」

そのとき、隔壁が開き、ステフが入ってくる。

ステフ「やっぱりね。」

お酒はダメなの知ってるんでしょ。

没収します」

というが早いか、鉄男のコップを取り

上げて、グイッと飲む。

鉄男「あっ」

ステフ「なに？　なんか文句でもあるの？」

鉄男「いや、あの・・・」

ステフ「証拠が残らないようにしてあげたのよ。

感謝してもらわなくちゃ」

と、ニヤッと笑う。

ステフ「冗談よ。」

ジョン、テッツオに一杯作ってあげて」

ジョン「ああ、驚いた」

ステフ「ジョン、あなたっていけない爺様じいさまね」

ジョン「少しぐらいいいじゃないか」

ステフ「まあ、ちよつとは大目に見ましよう。

これおいしいわね。

どれぐらい、持ち込んだの？」

ジョン「おおよそ、5ケース」

ステフ「どうだか。

でもほんとに飲み過ぎはよくないから、

日曜日と、水曜日に1杯づつね。

わかった？」

ジョン「わかったよ、わかった」

と、ジョン、舐めるように、名残惜し

そうにチビチビと。

ジョン「テッツオ、君は火星移住者の心理テ

ストを受けたのかい？」

テッツオ「いいえ、なんですか、それ」

ジョン「そうか、この中で受けたのは私だけか。

火星へ移住するには短くて半年、長いと1年余りの宇宙船内での生活をしないとけない。

さらに火星でも狭い生活環境が待っている。その狭い空間で、顔を突き合わせて平和に生活してゆくには、それなりの才能がいる。最悪、殺し合いだってありうる。

その危険を避けるためのテストだ」

ステフ「そのテストのことは聞いたことがある。

コンピューターテストと、実地テストがあるのよね」

ジョン「そう。

火星行きたさに、自分の心を偽って回答しても、300問のテストで、それなりの傾向があげられる。

コンピューターのテストでは設問に対して、（はい・いいえ・わからない）の選択を

10秒以内にしないとイケない。

たとえば、（白人が一番優秀である）という

質問に答えるんだ。

まして3週間の共同生活テストでは、いろいろなストレスが押し付けられて、否応なくその人の性格が現れる」

鉄男「何が知りたいのですか？」

ジョン「その人が人類という概念をしっかりと持っているかどうか判断基準となる。」

人間は、人種・宗教・思想・政治的立場で戦争に明け暮れてきた。

火星の小さなコロニーでそれをやられたら人類の未来はない。

それを避けるため、そのような危険な傾向のある人は、はじかれる」

ステフ「完全に清い人たちを選ぶことは不可能だわ」

ジョン「そうだ。」

実際、この移住計画に資金を提供した大富豪の子供たちは、テストの結果は度外視して、移住者に加われる。

「一つの不安材料だね」

3人とも押し黙ってしまった。

不思議そうに3人を見回すキャリー。

鉄男「たしか夫婦単位で乗り組むんでしたね。

その夫婦に子供がいたときはどうなるんですか？

地球からの打ち上げロケットの加重はすごいでしょう？

子供は耐えられますか？」

ジョン「妊娠中と、生後3年までは乗れない。

最近の打ち上げロケットは加重3Gまでに改良されているから、それより大きい子供はOKだ」

鉄男「そうすると、マーズ7号の56人の中には子供もいるんですね？」

ジョン「うん。

1夫婦2人までの子供が認められている。

それ以上子供のいる夫婦ははじかれる」

ステフ「それとあらゆる人種の夫婦が選ばれてるそうね」

ジョン「うん。

遺伝子の多様性は人類が生き延びるための
武器になるから」

○操縦室（夕方）

4人が座席に座っている

ステフ「3回目のレポートは終わったけど」
ジョン「どうだ、平気かい？」

鉄男「ええ、慣れてきました。

もう大丈夫です」

ステフ「よかった。

あ、もうそろそろね。

ヒューстонからの定時通信」

その時、モニターが光る。

「スペースビテオフォン会社」の文字。

コンピューターの合成音声。

コンピューター「ジョン・ダーウエルさんに、
エディ・ダーウエルさんから、コレクトコ
ールです。

1分間100ドルの料金ですが、お受けに
なりますか？」

ステフ「誰なの？」

ジョン「息子だ。」

受けます、つないでください」

5秒少々で、画面に中年の男性が。

ジョン「やあ、エディ、元気か？」

エディ（55）「やあ、父さん」

ジョン「なんだ、急に」

エディ「100万ドル融通してくれ」

ジョン「藪から棒に何だ」

エディ「会社が倒産しそうなんだ。」

弁護士が来てるから、手元の手書き入力で

サインしてくれ」

ジョン「ちよっと待てよ。」

突然の連絡で（父さん元気か）ぐらい言えないのか」

エディ「あんたはそんないい父親じゃなかったから、これで十分だ。」

頼んだぞ」

画面からエディが消える。

と、ダーウェル家の弁護士アーノル

ド・モリソン（61）が画面に。

ジョン「モリソン！」

モリソン「そういうわけで、エディに頼まれたから、気は進まないが引き受けた。

どうする？」

ジョン「しかたない。

倒産というのは本当か？」

モリソン「エディの会計士から財務を見せられた。

本当だ」

ジョン「しかたないな」

といってタブレットの署名欄にサイン。

ジョン「頼んだぞ」

モリソンは手を挙げて席を立つ。

その時一人の美しいアフリカ系老婦人が席に。

マギー（ジョンの元妻70）「あなた、ありがとう」

ジョン「あ、マギー！」

彼女は一礼して席を立つ。

ジョン「待ってくれ、マギー！」

モニターは暗転。

通話料金が表示される。

呆然とするジョン。

顔を見合わせるステフと鉄男。

ステフ「マギーって誰？」

ジョン「別れた私の妻だ」

と、再びスペースビデオオフィンの表

示が。

コンピューター「こちら、スペースビデオフ

オン会社です」

ジョン「あ、マギーか？」

コンピューター「予約をなさったミランさん、

いらっしやいますか？」

ステフ「はい、私です」

コンピューター「ミランさんとの通話が可能です。

なお、通話料金は1分100ドルですが、
ご了解いただけますか？」

ステフ「はい」

モニターに、父のジョージ・ミラン（6

8）と母ヘザー（66）が現れる。

背景はアメリカ家庭のありふれた居間。

ジョージ「あ、ステフ、母さん、ステフが写
ってる」

ヘザー「ステフ、ステフなの？」

ステフ「そうよ、わたしよ」

ヘザー「元気そうね、大丈夫？」

ステフ「元気よ、心配しないで」

ヘザー「あ、隣は・・キャリアだね。

すっかり大きくなって」

キャリア「おばあちゃん、こんにちは」

ヘザー「ああ、こんにちは。

お前も元気かい？」

キャリア「うん」

ジョージ「マクニールさんから聞いたが、も
う地球には帰ってこれないんだな」

ステフ「そう・・お父さん、お母さん、ご
めんなさい」

涙が流れ出すステフ。

ヘザー「(涙を拭きながら)寂しくないかい」

ステフ「キャリーもいるし、テッツオもいる

し・・・」

ヘザー「テッツオって誰？」

ステフ「(鉄男の肘を引き寄せながら)私のボ

ーイフレンド」

ジョージ「なんだって！」

鉄男、目を丸くする。

ヘザー「まあ！」

ジョージ「何者なんだ、その人は」

ステフ「宇宙飛行士よ。

テッツオ、挨拶して」

鉄男、しどろもどろに

鉄男「・・・お初にお目にかかります。鉄男で

す」

ジョージ「なんで先に知らせなかった！」

ステフ「仕事でそれどころではなかったの」

ヘザー「テッツオ、あなたはステフを愛して

いるの？」

ジョージ「馬鹿なことを聞くんじゃない」

鉄男「あの、私は・・・」

ヘザー「だって、あなた」

ジョージ「下の料金見て見ろ！

もう300ドルだぞ。

肝心なことを聞くんだ。

ステフ、ほんとに地球に帰れないのか？」

ステフ「ええ」

ヘザー「キャリー、ママの傍に立ってみて」

キャリー、ステフの傍に。

ジョージ「3歳だったわね。

3歳にしては背が高いと思うけど」

ステフ「宇宙では背が伸びるものなの」

ジョージ「元気なことが分かったら、十分だ。

切るぞ。

もう耐えられん」

ヘザー「待って、あなた」

ジョージ、目に涙を溢れさせながら、

通話スイッチを切る。

ヘザー「ああっ 私のステフ！」

ステフ「お母さん！」

突然モニターは暗転。

ステフ、泣き崩れる。

ジョン、キャリーの手を取って

ジョン「ホイールに戻ろうね」

戸惑うキャリーを連れてスポークで下に降りるジョン。

鉄男、ステフの肩に手を添える。

ステフ、泣きながら鉄男にすがる。

しばらくして泣き止んだステフ、鉄男から離れる。

ステフ「ごめんなさい。

見苦しいところをお見せして」

鉄男「いえ、泣いて当り前です」

ステフ「あなた、ご両親は？」

鉄男「・・・亡くなりました」

ステフ「ほかにご家族は？」

鉄男「姉夫婦がいます」

ステフ「お姉さまには、今度のことは話してあるの？」

鉄男「ええ、泣かれてしまいました」

ステフ「そうよねえ」

鉄男「ジョンには家族は？」

ステフ「早くに離婚して、奥さんは子供を連れて出て行ったそうよ。

さっきの人たちね」

鉄男「じゃあ独り身」

ステフ「仕事にかまけて家族を失ったと悔やんでいたわ」

鉄男「それは気の毒に」

○操縦室（朝）

やはり、4人が席についている。

鉄男「コツが飲み込めてきました。

今日は、続けて38万Kmを2回跳びます」

ステフ「ちよつと無謀だわ、いくらなんでも」

鉄男「今の火星までの距離は？」

リンカーン「おおよそ6500万Kmです」

鉄男「どんどん火星が遠くなっています。

このままではとても7号に追いつけません。

無理を承知です」

ステフもジョンも言葉がない・

鉄男「前と同じ画像を」

リンカーン「はい」

鉄男「よし」

シーンと水を打ったような静けさ。

モニターに表示された移動距離から成

功したことが分かる。

鉄男「もう一度」

移動距離の変化で成功と知れる。

鉄男が唸る。

呼吸が荒くなる。

ステフとジョン、ベルトを外して鉄男

を浮かせ、居住区へ。

キャリアー、ステフの肩に掴まり泳いで

ゆく。

○ 医務室

ステフ、寝ている鉄男の腕に点滴を。

キャリアー、鉄男の手を握りしめる。

ジョン「このまま続けられるのかなあ。

単純に6500万Kmを38万Kmで割ると、おおよそ170回レポートしないといけない。

とても体がもたないよ」

ステフ「テツツオが休んでいる間は、プラズマビームエンジンが動いているから」

ジョン「エンジンは最高秒速30Kmだけど、最初はゆっくり動き出し、少しずつ加速していくから、平均速度はもっと低いはず」

ステフ「7号はあと2か月ちよつとで火星を
通り過ぎる」

ジョン「1日3回レポートすれば、2か月で追いつくが……。体が持つかなあ」

ステフ「一回ごとに十分休養させれば……」

ジョン「ヒューストンに相談してみては」

ステフ「そう、私たちだけで決めるにはあまりに重大だし……。

今からヒューストンに連絡するわ」

ステフ、席を立つ。

キャリー、鉄男の手を握りしめたまま、

キャリー「私、ここにいる」

ステフ「そうして。」

この点滴の袋が空になり始めたら、その

マイクでママを呼んでね」

キャリー「うん」

ステフ「ジョン、お願いね」

ステフ、鉄男の頬をなでる。

ジョン「わかった」

○ 操縦室

ステフ、通信機のスイッチを入れる。

モニターに arrival の表示。

マクニール「It looks like you succeeded

again. Good. Here you go.」

字幕（今回も成功したようだね。

よかった。どうぞ）

ステフ、モニターのマクニールに話し

かける。

ステフ「He teleported twice this time.

It seems that the load was still too much
for Tetsuo.

I'm not sure if he can continue]

字幕（今回、2回レポートしたんですが、
やはりテツオには負荷が大きすぎたよう
です。

このまま続けられるのか不安です」
しばらく無音の時間。

マクニール「Send me the medical data of him.

Our medical team will review it. Over]

字幕（彼のメディカル・データを頼む。

こちらの医療チームが検討する。どうぞ）

ステフ「Yes, sir. Please.」

字幕（わかりました。お願いします）

ステフ、通信機のスイッチを切る。

○ホイール・ルームA

鉄男がステーキを頬張っている。

ステフ「すごい食べっぷりね」

鉄男「心配かけてすみませんでした」

ジョン「点滴が効いたようだね」

キャリー「そのフライドポテト、私にも少し

頂戴」

鉄男「ああ、はいどうぞ」

鉄男ティッシュでひと塊かたまり摘まんでキ

ャリーに渡す。

キャリーむしゃむしゃ食べる。

ステフ「あなたも元気ね」

キャリー「うん。おいしいよ。」

ママもどう？」

ステフ「ああ、もうそろそろ昼食ね。」

ちょっと早いけど、食事にしましょう。

あ、それからテツツオ、食後にこの錠剤を

呑んでね」

鉄男「なんですか、これ」

ステフ「あなたの倒れた原因は、脳の代謝異

常らしいとヒュー斯顿から連絡があつた

の。

あなたの脳はすぎまじい速度で神経伝達が

行われ、そのため、アミノ酸の利用が追い

ついていないためらしいと。

それでこの薬を飲んだほうがいいと」

鉄男「1日1回ですか？」

ステフ「いいえ。」

この（ブレイン1）という薬はもともと脳の障害者のため開発されたもので、たとえば会話が困難な障害者は、これによって、ある程度スムーズに話ができるようになってきたそうよ。

でも習慣性があるから、3日に一回だけ」

鉄男「麻薬みたいなものですか？」

ステフ「それほど危険ではないけど」

鉄男「ふーむ」

T 「23日目」

○ホイール・ルームA（夜）

ジョンと鉄男が壁面の野菜育成ポック

スを見ている。

ジョン「この土を見てごらん」

鉄男「赤いですね」

ジョン「これは本当の火星の土だよ」

鉄男「その土で栽培って、難しいんじゃないですか」

ジョン「もともと栄養分がないし、微生物がない。

金属成分も少し多い。

それなりの苦労はあるけど、それらを修正したら、ほら育ってるだろ」

鉄男「ほんとですね」

野菜から、横の銀色のものに目を移す
鉄男。

鉄男「これはなんですか」

ジョン「知らないのかい。これ、有名なロボットだよ。

船外活動は、危険な宇宙放射線が飛び交っているから、人間はもうやらないんだ。

代わりに、このアイオンがやってくれる」

鉄男「へえ。これ動かせるんですか」

ジョン「やってみよう。

アイオン、こちらに来なさい」

二足歩行ロボットのアイオン、壁の充電装置から離れてこちらへ、スムーズにやってくる。

ジョン「彼は簡単な言葉を理解するが、返事はイエスとノーだけだ」

そこへキャリアが駆けてくる。

キャリア「ダディ、私頭洗ったよ。

ほら、きれいでしょ」

鉄男「うん、ほんとだ」

キャリア「ダンスしようか？」

鉄男「うん、やろう。」

ジョン、このアイオンは踊れますか」

ジョン「さあ、やらせたことがないから、何とも言えんな。

でも、面白いからやってみよう。

リンカーン、ビーチボーイズの（グ

ッド・バイブレーション）を再生して。

アイオンも真似をして踊れ」

リンカーン「承知しました」

鉄男「古い曲ですね」

ジョン「そうさ、私と同じくらいにね」

すぐに音楽が鳴りだし、3人はそれぞれ踊りだす。

*I love the colorful clothes she wears
And the way the sunlight plays upon her
hear*

*I hear the sound of a gentle word
On the wind that lifts her perfume
through the air*

*Im picking up good Vibration
She s giving me the Excitation . . .*

3人は、勝手気ままに体をゆすり、
アイオンもそれなりに体を動かす。
そこへ入ってきたステフ。

ステフ「私抜きで踊るなんて、ずるい」
と、言いながら腰を振り、手を振る。
曲が終わると、

鉄男「今度は日本のダンスミュージック。

リンカーン、東京音頭を」

リンカーン「そんな曲、ライブラリにありま

せん」

鉄男「じゃ、私が歌う。

みんな、私の真似をして」

鉄男、自動翻訳器をはずす。

ハア 踊り踊るなら チヨイト

東京音頭 ヨイヨイ

花の都の 花の都の真ん中で

ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ。

ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ

チャンカチャンカ チャンカチャン

チャンカチャンカ チャンカチャン

4人の人間と一体のロボットが踊り続ける。

ステフ「変わったダンスね。

でも簡単でいいわ」

と、その時、プシュツという音がして、

部屋に大風が吹き始める。

そして、キャリーの体が宙に浮き、

ステフが抱き寄せる。

ステフ「なに、これ？」

ジョン「床に穴が開いた！」

ステフ「え？」

ジョン「テツツオ、二人を隣の部屋へ！」

鉄男、ステフとキャリーを抱いてテレポルト。

○隣の資材庫（夜）

急に現れた三人、

鉄男「ここにいて」

鉄男一人、元の部屋へテレポルト。

○ルームA（夜）

鉄男、出現。

ジョン、風に逆らいながら、壁の棚か

ら（repair kit）と書かれたケ―

スを引き抜く。

その中から20センチ四方の金属板を取り出す。

ジョン「テツツオ、あの床に開いた穴が見えるかい？」

鉄男「ああっ、はい」

ジョン「あの穴に、この板の赤い面を張り付けてくれ」

鉄男、板を受け取ると瞬時にその穴の正面に跳び、穴に吸い込まれそうになりながらも、張り付ける。

とたんに風が収まる。

ジョン「隕石がぶつかった。

小さいやつでよかった。

ほら、これだ」

ジョン、10mmぐらいの石つぶてを。

ジョン「リンカーン、至急空気を補充！」

リンカーン「はい」

ジョン「アイオン、船外で外の壁を補修！

リンカーン、ホイールの回転を止めろ」

アイオン、ピーと音を発し、エアロツ

クへと向かう。

○ 操縦室（夜）

モニターに、ホイールに張り付いている
アイオンが映っている

補修板を人差し指のバーナーで溶接す
るアイオン。

ジョン「終わったか？」

アイオン「ビー」

ジョン「よし、帰ってきなさい」

アイオン「ピー」

アイオン、ホイール全体をカバーして
いる非回転手すりにはめていたロープ
のついたテザーを解いて腰のロープ
ボックスに収納。

手すりを伝ってホイールのエアロック
へ。

○ ルーム A（夜）

戻ってきたアイオン。

スビーカーからステフの声。

ステフ「もう入ってもいい？」

ジョン「ああ、もういいよ。

アイオン、ホイールを回転させて」

隔壁が開き、ステフとキャリアが入ってくる。

と同時にホイールが回転し始めてよろける。

キャリア「ダディ、怖かったね」

鉄男「ほんとだね」

ステフの顔も青ざめている。

ジョン「アイオン、床の補修板を溶接」

アイオン「ピー」

やはり人差し指の炎で溶接。

ジョン「リンカーン、シールドは大丈夫か？」

リンカーン「プラズマビーム推進装置は正常で、シールドは守られています」

鉄男「なんだか難しそうですね」

ジョン「私もよく分からない。

でも、知らなくても平気さ」

T「25日目」

○回転ホイール回廊（朝）

ジョンと鉄男、ステフとキャリーの先
10mを歩いている。

ジョン「テツツオ、君は鈍いのかい？」

鉄男「え？」

ジョン「だからさ、ステフのことさ」

鉄男「彼女がどうかしましたか？」

ジョン「ああ、いらいらする。

彼女の君への想いさ。

わからないのか」

鉄男「想いつて」

ジョン「だからさ、何でもないので君の腕に
手を掛けたり、頬を触ったり」

鉄男「ああ、あれは多分体温を測ってるんで
しょ」

ジョン「いやはや、あきれ果てた男だね。

あれは、君に恋しているサインなんだよ」

鉄男「・・・そんなはずないです。

彼女は医学博士、私は高校出の旋盤工。

金もなければ財産もない。頭も悪い。

ありえないです」

ジョン「この宇宙では、金も財産もなんの意味もない。

欲しいものが買えるでなし、高い地位に着けるでなし。

ここで値打ちのあるものは、唯一人間性なんだよ」

鉄男「でも、私なんか・・・」

ジョン「ああ、いまいますい。

君と話している間、彼女が自分の髪に何度も手を当てているのを知っているのか？

もういい、腹が立ってきた」

ジョン、速度を上げて歩き去る。

後ろを見ると、ステフが彼と目が合っ

て、自分の髪をかき上げるのを見る。

鉄男、キツと前を振り向き独り言。

鉄男「おいおい、冗談だろ？

ほんとだったらどうする」

急に噴き出した汗をぬぐう鉄男。

○ホイール・ルームA

ジョンは壁面のモニターで地球のニュースを見ている。

キャリーは野原の花と蝶の写真を見ながらスケッチブックに蝶を描いている。

それを見ている鉄男。

突然、キャリーがスケッチブックに書きなぐる。

鉄男「どうしたの？」

キャリー「いくら描いたってちようちよは飛ばないもん」

鉄男「そうか・・・、よしよし。」

ジョン、そのノートの紙1枚いただけませんか？」

ジョン「ああ、いいよ」

と、ルーズリーフから1枚外して鉄男に渡す。

鉄男、その紙に羽根を開いた蝶を描き、子供用のはさみで切り抜く。

さらに2センチ幅の紙を筒状に丸めて
蝶の真ん中にテープで接着。
そして羽根に角度をつける。

鉄男「さあ、できた」

キャリー「そんなの飛ばないよ」

鉄男「見ててご覧」

と、その蝶を手のひらに、3mの天井
へテレポートし、そこから蝶を放す。
蝶はヒラヒラと低重力の空間を舞いな
がらゆっくり降りてくる。

ジョンは手元のノートでそれを扇ぐ。

ふたたび蝶は上へ。

キャリー「うわーい！」

追いかけて手で蝶をつかまえる。

鉄男「それじゃ、もつとちようちよを作りま
しょう」

と、5羽の蝶を描き、キャリーにはさ
みで切り抜かせる。

鉄男「キャリー、ちようちよに色を塗って」

キャリー、蝶に赤や青など様々な色を

塗る。

鉄男、出来た蝶を全部手に再び天井へ。

鉄男「さあ、ちょうちよのダンスだ！」

色とりどりの蝶が舞い始める。

キャリー「すごい！　すごい！」

そのときステフが帰って来て、宙を舞

う紙の蝶に目を見張る。

ステフ「うわあ！　なにこれ！」

ジョン「キャリーとテッツオが作ったんだよ」

ステフ「そう！」

あなた幼稚園の先生になれるわよ」

と、鉄男の頬にキス。

ドキッと心臓が止まりそうになる鉄男。

T 「35日目」

○居室A（夜）

4人がテーブルの前に、カードで神経

衰弱をやっている。

ステフ「さあ、私の番ね。

じゃ、これ」

カードを1枚裏返す。

スペードの5。

ステフ「もう1枚は」

めくるとクラブのジャック。

ステフ「キャリー、カードを覚えた？」

キャリー「うん」

カードを閉じるステフ。

鉄男「今度はダディだ」

と、1枚めくると、ダイヤの5。

鉄男「しめしめ、これでカードはダディのもの」

と、さっきのスペードの5のすぐそばの、違うカードをわざと間違って引く。

鉄男「ああ、残念！」

キャリーが嬉しそうにケタケタ笑う。

ジョン「よしよし、これでいただきだ」

と、スペードの5とダイヤの5を開き、

自分の手札に入れる。

キャリー「ああ、ダメ！ それは私のカード」と怒り出す。

ジョン「何を言ってるんだ。わからんやつだなあ」

鉄男「ねえ、グランパ、相手は子供じゃない」

ジョン「なんで私が君のじいさんなんだ！

それに、世の中は厳しいんだ。

子供のころからハードなルールを知ってお

いたほうがいいんだ」

鉄男「この宇宙のど真ん中でそれを持ち出すんですか。

明日をも知れぬ私たちなのに。

ジョン、ここのところ、ちよつといらいら

してませんか？

大丈夫ですか？

なにかあるんなら、私やステフに相談してください」

ジョン「何もないよ！

何もないから、いらつくんだ。

マギーの奴め、話そうともしないで」

ステフ、あっけにとられるキャリーの
手を引いて、

ステフ「もう遅いから、寝るわね」

鉄男「お休み」

ジョン「・・・お休み」

あとには気まずく取り残されたジョン

と鉄男。

鉄男「あなたに打ち明けたいことがあります」

ジロツと睨みつけるジョン。

鉄男「私は、実の父を殺しました」

ジョン「え」

鉄男「ずいぶん前のことです。

父が母を殴り殺したとき頭に血がのぼって、

父を捕まえて、空の高みから投げ落として

殺しました。

このことは誰にも話したことはありません。

N A S A も J A X A も知りません」

ジョン「ほんとうか？」

鉄男「ええ」

ジョン「なんでまた私に話すのだ？」

鉄男「マーズ8号に乗ってからあなたと接

して、こんな人が私の父だったらよかった
のにと・・・。

他人なのに恋の手ほどきまでしてくれて。
さっき言ったことは度が過ぎました。

許してください」

鉄男、ジョンを軽くハグして、自分の

寝室へ。

とまどうジョン。

○ステフの寝室（夜）

寝室のドアを少し開けて、寝ているキ
ヤリーのそばでこれを聞いていたステ
フ。

○その夜の鉄男の寝室

ドアが音もなく開いて、ステフがベッ
ドにもぐりこんでくる。

鉄男、驚いてベッドの奥へ。

しずかに扉を閉めるステフ。

ステフ「さっきの話聞いたわ」

鉄男「何の話？」

ステフ「あなたのお父さんのこと」

鉄男「ああ」

ステフ「なんかある人だとは思っていたけど」

鉄男「・・・」

ステフ「余程のことだったのね」

鉄男「・・・」

ステフ「この話は、私も墓場まで持っていくから心配しないで」

鉄男「後悔はしていませんが・・・」

ステフ「いいのよ」

ステフ、鉄男の体に腕を伸ばし抱きしめる。

鉄男、ためらいながら、唇を彼女のそれに重ねる。

小一時間後、彼女の前髪をやさしく

撫でる鉄男。

鉄男「前から聞こうと思ってたんですが、キャリアーの実のお父さんのこと」

ステフ「ああ、あの人」

鉄男「それ以後連絡はあるんですか？」

ステフ「いいえ、無いわ。」

だって奥さんいるもの」

鉄男「NASAは知ってるんですか、あなたたちのこと」

ステフ「もちろん知ってるわ。」

こっぴどく叱られたわ。」

でも、起こったことはどうしようもない。」

あきらめて、今では応援してくれているわ。」

それに、宇宙での出産・育児は医学界で

貴重な研究材料なもの」

鉄男「後悔はしていませんか？」

ステフ「彼との恋については、やっぱり浅はかだったと思う。」

恋愛中はそんなこと考えもしなかったけど。」

キャリアーの顔を見るたびに、すまない気持ち

ちになるわ」

鉄男「今の私たちのことは？」

ステフ「前のこともあるし、今度は気を付け

ようと思ったの。

でも、キャリアーと遊んでくれているのを見て、この人優しい人なんだと……。

この人となら……」

鉄男「キャリアーのためだけですか？」

ステフ「いいえ……、いいえ」

鉄男「ステファニーさん……」

黙って二人は抱き合う。

ホイルルの回廊（朝）

散歩する4人

ジョンが寄って来る。

いたずらっぽい表情で、

ジョン「今晚は特別に一杯やるか？」

鉄男「ああ、はい、喜んで」

ステフ、ニコニコして黙って聞いている。

T 「41日目」

○ 操縦室

操縦席で、鉄男が大きな深呼吸。

ステフ「今日で102回のテレポーターション。」

ほんとに体が慣れてきたのね。

前みたいに倒れることもなくなったし」

鉄男「ええ、それもステフ、あなたのケアのおかげです」

ステフ「そうよ」

ジョン「ヒヤア、お二人さんホットだなあ」

鉄男「そんなんじゃないです」

ステフ「(鉄男の目を見つめて) そんなのよ。そうでしょ、テツツオ」

鉄男、顔を真っ赤にして口ごもる。

ジョン「こいつ小娘みたいだな」

ステフ「さて、ヒューストンとの定時連絡」

ステフ、カメラに向かって話し始める。

ステフ「ヒューストン、ヒューストン。」

こちらマーズ8号。

今日はお聞きしたいことがあります。

以前の通信でマーズ7号とは連絡しない

ように言われていました。

連絡を取り合うと、うまく助けられなかったときのショックが大きすぎるからと。

でも。もう直接連絡してもいいと思います
が、いかがですか。

「ご返事をお待ちします、どうぞ」

スイッチを切るステフ。

ジョン「7号の人たちはどんなだろうなあ。

ちよつと想像がつかない」

ステフ「もう助からないって思ったら、どう
するでしょう」

ジョン「自殺する人も出てくるんじゃないか。

木星を過ぎ、土星を過ぎ、そして海王星を
過ぎたりしたら」

鉄男「それよりまず食料と水と酸素が……」

ステフ「そうよ。そうだわ。

私なら安楽死を……」

と、言いながら、横のキャリアを見て
ハッとする。

ステフ「ダメ、ダメ。何としてでも生き残ら

ないと」

○ ホイールルーム A

昼食を摂っている4人。

鉄男とジョンは、ビーフカレーライス
とオニオンスープ。

ステフとキャリーは野菜と肉入りのミ
ネストローネスープとクラッカー。

キャリー「ママ、このスープ熱いよ」

ステフ「ほんと？」

と、スプーンに掬って飲んでみる。

ステフ「ほんと、熱いわね。」

ママが冷ましてあげる」

と口で息を吹きかけ冷まそうとする。

それを見ている鉄男。

○ (回想始め)

○ 6 畳一間のアパート (夜)

母由美子 (29) が、2つの茶碗に少
ないご飯を盛って、ちゃぶ台に運んで

くる。

机の上の醤油さしを取り、2つのご飯に少しずつ垂らす。

由美子「紗枝ちゃん、鉄ちゃん。」

今日はおかずが無いけど我慢してね。

明日には内職のお金が入るから。

さあ、おあがり」

紗枝（9）「お母さんののは？」

鉄男（6）「そうだよ、お母さんの分は？」

由美子「先に食べちゃったからいいのよ」

と、立ち上がり、二人に背を向けて、

流しの前で湯飲みに一杯水を汲み、ゆ

っくり飲んでゆく。

事情を知っている紗枝は、辛そうな顔

をして、ご飯を口に運ぶ。

鉄男も黙って食べる。

○（回想終わり）

ステフ「テツツオ、どうしたの？」

おかしな顔して」

鉄男「え、ああ、二人を見ていて、昔のことを思い出したんだ。

昔のことを・・・」

T 「39日目」

○ 操縦室（朝）

鉄男、操縦桿を握りしめ、モニターの火星軌道を見つめる。

軌道のその先に、赤いゴルフボールほどの星が光る。

ジョン「とうとう火星が見えてきた」

ステフ「それより困ったことがあるの」

ジョン「ヒューストンのことか？」

ステフ「そう、この7日間、連絡がないの。

どんなに長くても2時間以内に連絡が取れるはずなのに」

鉄男「それって」

ジョン「大変なことだ。

そのためここ1週間軌道修正が出来ていな

い」

ステフ「それより前から、通信の質が落ちていたので、心配していたの」

ジョン「リンカーン、通信アンテナは正常か？」

リンカーン「正常です」

ジョン「じゃ、なんで通信が出来ないんだ」

リンカーン「まったく通信が来ていないのではありません」

ジョン「言ってることの意味が分からない」
リンカーン「通信は入っていますが、通信のレベルが低かったため、ノイズと判断しました。」

再生しますか？」

ジョン「それなら早く言ってくれればいいのに」

リンカーン「指示がありませんでしたから」
ジョン「ああ、そういうことか。」

わかった。直近の連絡を再生してくれ」

モニターに縞模様が次々と。

さらに雑音が。

ジョン「これは一体？

やっぱりノイズか」

しばらく画像を見つめる4人。

キャリー「なんか言ってるよ」

ステフ「え？ キャリー、分かるの？」

キャリー「人の声だよ」

考え込む3人。

鉄男「そうだ、画像を早送りできますか」

ジョン「早送り？」

ステフ「もしかしたら・・・」

ステフ、画像調整ダイヤルを回す。

ダイヤルが早送りになるにつれ、画像

と音が正常に。

マクニール「こちらヒューストン。こちらヒ

ューストン、聞こえますか？」

ステフ「あっ、」

リンカーン「続いて次の通信です」

マクニール「今日も聞こえてないんだよな。

でも送信しよう。

こちらヒューストン、聞いてくれ。
そちらは大変なことになっている。
君たちの8号が7号の真後ろにいる。
こんなに早く追いつくはずがないのに。
考えもしなかったことが起こってしまった。
専門家が言うことには、原因はテレポー
テーションらしいということだ。
光は1秒間に30万Km進むが、君たちの
船は、一瞬で38万Km進んだ。
ということは、光よりも早い。
光よりも早く進むとき、どんなことが起き
るかは、学者の間でもよく分かっていない。
でも今度のこと、8号の船内よりも外
の世界は、時間がゆっくり進むらしいこと
が推測される。
そのため、まともな通信はできないのでは
ないかと思われる。
7号は君たちより80万Km先にいる。
今からはマーズ7号との通信を許可する。
宇宙空間座標は、火星の東キャンナル基地か

らもらってくれ。

東キヤナルと通信できるか分からないけど、ヒューズトンとのやり取りでは急ぐ間に合わないから。

以上、健闘を祈る。

こちらヒューズトン、通信終わり」

船内に静寂が流れる。

混乱して考えがまとまらない一同。

突然モニターが光る。

ステイブ・ランカスター（30）「マーズ8号、マーズ8号。

こちらマーズ7号、マーズ7号。

コマンダー船長のランカスターです。どうぞ」

音声にエコーが懸かり画面が脈打つ。

ジョン「あっ、来た！」

ステフ「マーズ7号、こちらマーズ8号のミランです。

ついさっきヒューズトンからの連絡をもらいました。

追いついて良かったです」

ランカスター「ほんとうによかった。

あなたたちの努力に感謝します」

ステフ「そちらの状況はいかがですか。

どうぞ」

ランカスター「・・・」。

残念ながら、3組の夫婦が早まって自殺してしまいました。

連絡を手短にします。

こちらはあなた方のすぐ前にいます。

ただ、このままでは8号とランデブーする

ことはできません。

進む方向と速度がずれているからです。

こちらの信号を頼りに迎えに来てもらえま

せんか」

ステフ「わかりました。

もうしばらく我慢して信号を発信し続

けてください。

そちらの速度はどのくらいですか？」

ランカスター「1秒に20Kmです」

ジョン「こちらは1秒14Km。

テレポーターションを一時休んでプラズマ
ビームで加速しよう。

速度を揃えないと」

ステフ「ランカスターさん、しばらく待って
いてください」

通信スイッチを切るステフ。

ため息をつく3人。

ステフ「リンカーン、7号の位置をとらえ
られる？」

リンカーン「正確な新しい位置は、さっきテ
レポーターションが終わったところなので、分かり
ません」

ステフ「そう」

続いてステフ、「火星基地」と書かれた

ボタンを押す。

ステフ「東チャンネル、東チャンネル。

こちらマーズ8号、マーズ8号。

応答をお願いします」

10秒ほど経って絵と音が入る。

やはり音にエコーがかかり、画面が脈打つ。

リチャード・メイヤーズ（35）「こちら東キヤナル火星基地、マーズ8号聞こえます

か？」

ステフ「こちらマーズ8号のミランです」

メイヤーズ「ああ、よかった。

火星基地司令官メイヤーズです」

ステフ「急なお願いで恐縮ですが、私たちの

8号と、もう1機の移住船7号の空間座標が至急必要なのですが、お願いできます

か？」

メイヤーズ「わかりました。

できるだけ早くお知らせします」

ステフ「いったん通信を終わります」

ステフ、スイッチを切る。

T 「50日目」

○2隻の宇宙船が並行して進んでいる宇宙

〇 8 号 操 縦 室

モニターにランカスターの姿。

ランカスター「とうとう追いつきましたね、

ほんとにありがとう。

みんな喜んでいます」

ステフ「ほんとによかった。

こちらの船への移動は？」

ランカスター「地球軌道上でやったように、

あの蛇腹式のシューターを使いましょう」

ジョン「あの、大量の物資を積み込んだ通路」

ステフ「連結は船外からやらないといけない」

ジョン「ロボットでやりましょう」

ランカスター「両方のシューターを連結しま

しょう。

両方ともホイール資材庫 F の床下に格納さ

れています」

ステフ「シューターは気密性は？」

ランカスター「もちろん大丈夫」

ステフ「じゃあ、早速やりましょう」

○2隻の宇宙船の並ぶ宇宙。

2隻のホイールの回転が止まる。

太陽光パネルが畳まれる。

2隻の距離が縮まってゆく。

8号の姿勢制御ノズルから炎が。

2隻のホイールが、ルームFを向かい
合わせに止まる。

2体のロボットがそれぞれのルームF
の外の格納扉を開く。

2体のロボットが、シューターの取
手を掴み、ジェットをふかして、シュ
ーターどうしの円形の接合金具を止め
た。

長さにして5m。

リンカーン「接続完了しました」

そのとき、明かりがすべて消える。

○マーズ8号ホイール・ルームF

ジョン「なんだ？

何が起こった？」

鉄男「いったい！」

ジョン「リンカーン、どうなってる！」

リンカーンは答えず、なんの動きもない。

鉄男「7号まで行って、状況を確認してきます」

鉄男、手探りで壁のフラッシュライトを取りはずし点灯。

それをジョンに渡す。

鉄男、そばにあった船内用宇宙服をまとう。

鉄男「ジョン、彼女たちを、ルームGへ避難させて、そのあと、ここで待機してください」

ジョン「よし！」

ステフ「テツツオ！」

ジョン、二人を押しして隣の部屋へ。

鉄男、3人が隣へ移り、隔壁が閉じられたのを確認してヘルメットを被り、ヘッドライトを点灯。

床下のシューターの隔壁のレバーを倒して開く。

○シューターの中

ルームFの空気の流れに押されて

鉄男、シューターの奥へ。

5 m進むと、7号の隔壁の前に。

腕の計器を見る。

鉄男「温度マイナス30度、酸素濃度19%」

鉄男、隔壁レバーを倒し7号の船内へ。

○マーズ7号ルームF

そこにやはり船内宇宙服を着た人間が

暗闇の中、ライトを灯して立っていた。

鉄男「マーズ8号の鉄男と申します。

ランカスター船長ですか？」

ランカスター「そうです。いったい、何がど

うなっているのか・・・」

鉄男「ごめんなさい、停電の話はあとで。

今シューターの中を調整しました。

こちらの隔壁を開いたので、シューターの
中の酸素濃度は呼吸可能になりました。

いつ8号へ移動しても大丈夫です。

少し寒いですが」

ランカスター「8号の中も停電しているの
ですか？」

鉄男「そうです。

でも、いずれにしろ、移動しなくてはなり
ません。

早速始めていただけますか？」

ランカスター「そうですね。

やりましょう」

ランカスター、ルームGとの隔壁開閉
ボタンを押すが開かない。

鉄男「停電していますから、手動レバーで」

ランカスター「お、そうだ、そのとおり」

といいながらレバーを倒す。

ルームGにはたくさんの人たちが列を
なして待っていた。

ランカスター「今からマーズ8号への移動を

始める。

慌てずに、ゆっくり移動してください。

シューターへは頭から入ってください。

私が人員確認しますから、ストップ言ったら、ちよつと待ってください。

じゃあ、どうぞ」

ランカスター、手にタブレットを持ち、移動した人の名にチェックを入れてゆく。

子供を抱いた親、子供と手をつなぐ親、夫婦が手を取り合って8号へ。

それを見ていた鉄男の胸が熱くなる。

○マーズ7号F室

宇宙服のヘルメットを脱いだ鉄男とランカスター。

ランカスター「やりましたね、ありがとうございます。

私とあなたで最後です」

とそのとき電灯が明るく灯る。

鉄男「ああ、よかった」

ランカスター「突然消えて突然灯^{とも}る。

一体何でしょう」

鉄男「分かりません」

ランカスター「コンピューターに解析させま
しょう」

鉄男「そうですね。

ところでこのあと、この船はどうなるんで
すか？」

ランカスター「たぶん星屑になってしまいうで
しょうね」

鉄男「なんとかならないでしょうか。

聞くとこの船一隻の建造に50兆ドルかか
っているそうですが」

ランカスター「進む方向さえ修正できれば、
ほんのちよつと望みがありますが。

あ、それでもだめだ。

7号が火星に近づいても、速度が速いか
ら、かえって火星の重力のため、速度を増
して飛び去って行くかもしれない」

鉄男「ああ」

ランカスター「50兆ドルは、もったいな
いですが・・・。

ほんとは耐久年数40年で、2台のマー
ズ号が40年で20回往復して2240人を
火星に送り届けるはずでしたが、しかたな
いですね。

あとは祈るばかりです

8号に帰りましょう」

鉄男「ちょっと待ってください。

つまりパラボラを正確に火星に向けられ
ば、減速できるんですね」

ランカスター「そうなんですけど、それは無
理でしょう」

鉄男「私は、地球出発以後、燃料節約のため、
テレポーションで軌道修正を毎日やっ
てきました。

これはあなたと連絡が取れてから考え始め
たのですが、今回もマーズ7号を回転させ
て、お尻を火星に向けることも可能ではと
思いますが」

ランカスター「本当ですか」

鉄男「急激に回転させると、機体に不具合が

起こることもあるんじゃないかと、だから」

ランカスター「角度にして少しづつ、ゆっく

りやれば・・・」

鉄男「やってみませんか」

ランカスター「ヒューストンに連絡してみます。

返事が来るのは遅くなりますが」

鉄男「それでは間に合いません。」

ランカスター「うーん。

このままいくと高い確率で7号は遠くへ

飛び去ってしまいます。

やってみましようか」

鉄男「それじゃ、あなたはマーズ8号へ移動

してください。

船長コマンダーがいなのは困りますから」

ランカスター「そうですね。

でもあなた一人で大丈夫ですか？」

鉄男「コンピューターがありますから。」

あ、この船のコンピューターの名前は？」

ランカスター「オリンです」

鉄男「8号に戻ったら、シューターをすぐ解

除して、7号から離れて下さい。

そばにいと危険ですから」

ランカスター「じゃ、これで。

健闘を祈ります」

○2機の宇宙船の浮かぶ宇宙

2体のロボットがシューターを格納している。

作業完了とともに、2体はそれぞれの宇宙船に帰還。

それとともに8号が7号から離れてゆき、それに伴って双方の太陽光パネルが展開される。

○7号操縦室

鉄男、メイン操縦席に。

突然8号との通信回路が開く。

ステフ「テツツオ、なにやってるの！」

鉄男「ああ、ごめん。夢中になって連絡を

忘れていた」

ステフ「7号をターンさせるんですって？」

鉄男「そうなんだ」

ステフ「それって危険なことでしょう？」

鉄男「分からない」

ステフ「マーズ7号よりあなたが大事だわ」

鉄男「それは分かるけど、人類にとっては、

この船は一筋の希望なんだ」

ステフ「待ってて。」

そちらへ行くから」

鉄男「あ、だめだ、だめだ」

ステフ「行きますっいたら、行きます」

鉄男「だめだっというのに！」

モニター暗転する。

○マーズ7号の救命艇格納庫

エアロックが解除されて、7号の救命

艇の横に、8号の救命艇が入ってくる。

入ると同時に扉が閉じて、空気が送り込まれる。

ステフ、キャリー、ジョンが宇宙服を着て降りてくる。

とはいってもキャリーの宇宙服はダボダボで、ジョンがかかえている。

○マーズ7号の操縦室

3人が入ってくる。

鉄男「ああ！」

ステフ「さあ、来たわよ。

やることだけやって、さっさと8号に帰りましょう」

ジョン「言うこと聞かないんたよ、この人は」

鉄男「ジョン、あなたまで」

ジョン「私たち4人は家族なんだ。

離れるわけにはいかない」

鉄男「仕方ない。

じゃ、やるから。

オリン、はじめまして。

岡田鉄男と申します。

君の力が必要です。

どうぞ助けてください」

オリン「こちらこそ、どうぞよろしく。

何をするのですか？」

鉄男「7号のパラボラを火星に向けます。

それを手伝ってください」

オリン「はい」

鉄男「火星をモニターに写してください」

即座にモニターに火星が画面右端に。

鉄男、ジョンとステフに説明。

鉄男「7号の進行方向を修正します」

鉄男、意識を集中して7号の向きを修

正する。

ロケットの先端が火星の少し右に来る。

鉄男「火星の地上から1万Km位に7号を浮

かべようと思います」

ジョン「人工衛星にするのか」

鉄男「できるかどうかわかりませんが」

ジョン「ちよつと待った。

テツツオ、ほんとにそれでいいのか？」

鉄男「分かりません。」

ISSが地上400Kmだから、それより高ければ・・・」

ジョン「大事なことを忘れてるぞ」

鉄男「えっ、何ですか？」

ジョン「ほらほら、火星で一番高い山は？」

鉄男「あ、オリンポス山！」

ジョン「そうだ。25000Kmの山だ」

鉄男「忘れるということは恐ろしいですね。」

じゃあ、どの位の高度がいいのでしょうか？」

か？」

ジョン「私にもわからない。」

人工衛星の高度設計はたぶんたいへんな計算に基づいていると思う。

だから、我々素人には無理だ」

鉄男「でも、今やらなきゃ」

ジョン「オリン、もともとマーズ8号が一年間待機する高度は？」

オリン「27000Kmです。」

これはプラズマビーム砲の高さとほぼ同じです」

鉄男「それでいきましょう。

オリン、火星の横に、プラズマビーム砲の位置を表示してください」

火星の横に青い点が表示される。

鉄男、マーズ7号の先端をそれに重ねる。

鉄男「赤経をワイヤー表示し、現在の7号先端を0として、ナンバーを振ってください」

オリン「はい」

鉄男「このカメラは、1台で同時に真後ろも写せるんですけどね」

オリン「そうです」

鉄男「後ろのカメラの画像を表示」

オリン「はい」

するとモニターの下半分に、7号のパラボラの上部分が写り、赤経のナンバーが12に。

鉄男「今から7号を回転させていきます。

まず赤経11に移動」

テレポーターションで、かすかなミシッという音とともに中央の赤経が11に。

こうして、時間をかけて機体を回転させてゆく。

6回試みたとき、画面に8号の機影。

鉄男、額の汗を拭う。

ステフ、持ってきたバッグの中から、チューブを4つつ取り出し、それを見んなに配る。

ステフ「水分の補給よ」

鉄男「ありがたい！」

キャリー「私も喉がカラカラ」

4人はゆっくり水を飲む。

鉄男「ああ、生き返った。

どうもありがとう」

ステフ「どういたしました」

鉄男「じゃ、続けます」

こうして後6回の移動で、モニターに

火星から27000Kmの位置に、7号のパラボラの中心が。

鉄男「オリン、火星のパラボラ砲と、この船のパラボラのズレがあるけど、プラズマビームの受け渡しは出来そうですか？」

オリン「この距離だと、向こうの発射砲が自動的に位置を修正できますから大丈夫です」

鉄男「よかった。

これから私たちは救命艇で8号に帰ります。オリン、あなたはプラズマビームを受けて逆噴射して、7号の速度を落とし、火星の人工衛星として、2年後まで、火星に墜落しない高度と、速度を保ってください。

出来る範囲でいい。

あとはまかせる。

さあみんな、帰ろう」

キャリー「なにがなんだかわからないわ」

ステフ「ほんとにね。

なんだか心配して損したわ」

○ 8 号 ルーム A

多くの人々が、立錐の余地なく立っている。

壁のモニターに7号の逆噴射の様子が映し出される。

ステフ「7号のみなさん、ご無事でなによりです。おめでとう」

ランカスター「ありがとうございます。」

ほんとにありがとう」

ジョン、秘蔵のウイスキーと紙コップをみんなに回す。

子供達にはオレンジジュースが。

おお！酒だ！酒だというどよめきが。

ジョン「違法に持ち込んだ私の最後のウイスキーです。」

心して味わってね」

オーという歓声が。

みんなに行きわたった時、ランカスターが紙コップを掲げ、

ランカスター「8号の皆さんののおかげで

我々は助かりました。

途中、絶望して自殺したウイチャリー家、

鈴木家、フラン家の6人に、哀悼の盃を揚げたいと思います。

7号よ、永遠に！ 乾杯！」

ランカスター、涙を溢れさせながら、酒を飲み干す。

部屋にはむせび泣く声が満ちる。

ランカスター「さて、これからですが、8号もプラズマエンジンを全開して逆噴射します。

それで火星の周回軌道に入り、火星への着陸を目指します。

みなさんは、以前住んでいたのと同じ居室で指示を待ってください。

普通に飲食・睡眠をとってもかまいません。指示があるまで、体調を整えて待ってください

さい」

T 「65日目」

○マーズ8号ホイール・ルームA

7号の乗組員6人が集まっている。

ステフとキャリーと鉄男、ジョンの4

人は、船内用の宇宙服を着ている。

みんな中央のモニターに釘付けに。

そこには、火星上空のプラズマビーム

発射砲の近くを通り過ぎる7号が。

ランカスター「やはりスピードが速すぎるよ

うだけど、リンカーン、7号は火星に留ま

れるのか？」

リンカーン「データが少なすぎて判断できま

せん」

ランカスター「そうか。

あとは祈るほかないな、さて」

ジョン「宇宙服の足と腕をたくし上げて、な

んとかキャリーのサイズを合わせたけど」

鉄男「苦しくない？」

キャリー「うん」

鉄男「あっという間だから」

ステフ「ようやく、火星の周回軌道に入って
2日。

みなさんは、今から着陸船で火星に向かいます。

たった6分の飛行で着陸できます。

6号までのすべての船が着陸に成功して

いますから、心配ないでしょう。

ところで、私と娘のキャリアとジョンは、

テツオさんのテレポーションで、直

接火星に降ります。

着陸船での負荷が、キャリアには耐えられ

ないからです。

皆さんとはしばしのお別れです。

東キャナルで会いましょう」

全員が拍手。

ランカスター「じゃ、私たちは着陸船に乗り込みます。

成功を祈ってます」

ランカスターたち乗組員6名は、鉄男

たちと握手して、スポークで着陸船へ

移動。

○マーズ8号着陸船操縦室

6名の乗組員全員が座席に着いている。

ラナカスター「火星表面の気象は？」

リンカーン「砂嵐も収まり、晴天です。気流

も穏やかです」

ランカスター「全員無事に座席に収まったよ

うだから、まず、貨物機を火星に下ろしま

す」

スイッチを押すランカスター。

○火星軌道上のマーズ8号

4機の貨物ロケットがスルスルと8号

から順次間隔をおいて離脱してゆく。

離脱したあと、順次突入姿勢に。

それまで着陸船を固定していた4本の

支持ステーが、留め金を解除されて、

大きく四方に開く。

着陸船は、ゆっくりホイール中心から

離れてゆく。

姿勢制御エンジンが作動して、着陸船を突入角度に調整。

尾部の補助エンジンから一瞬炎が噴き出し、8号は火星の大気の中へ。

○火星大気圏の8号

3分過ぎたとき、姿勢制御エンジンが、機体を火星地表に対して90度に調整。固形燃料のメインエンジンが動き出す。急速に地表が近づいてくる。

8号の尾部から着陸用の4本の足が開く。

○東キャナル基地の着陸場

8号が炎を噴き出しながらゆっくり近づき、4本の足が大地を掴む。

同時に噴射が終わる。

その周囲には間隔を取って貨物機が着陸を完了している。

○ 8 号の緊急救命艇

緊急救命艇に座っているキャリー、ステフ、鉄男、そしてジョン。

鉄男「いよいよ出発ですね」

ステフ「リンカーン、最後の任務よ。」

救命艇を吐き出して」

リンカーン「はい、どうぞご無事で」

ステフ「ありがとう、リンカーン。」

あなたは、16か月後に地球に帰るのね」

リンカーン「はい。」

また新しい着陸船を積んで戻ってきます」

ステフ「さようなら」

リンカーン「さようなら」

○ 8 号ホイール

船体から、6人乗りの救命艇が吐き出される。

救命艇は姿勢制御エンジンをふかして、機体を火星表面と平行に。

○救命艇内部

鉄男、ヘルメット内の3Dゴーグルをセツトする。

見回すと、上は満点の星空。

下は荒涼とした火星の大地。

画像は右から左へとゆっくり動いてゆく。

しばらくして東キヤナルの特徴的な星形の構造物が。

鉄男「東キヤナルが見えました。

これから降ります」

ステフ、キャリーの方を見る。

キャリーは興味津々の面持ち。

何回か高度を変えながら瞬間移動を

繰り返し替えて地表近くに。

○東キヤナル基地の着陸場

救命艇が地上10mのところまで静止。

そして小刻みに高度を下げ、着陸。

途端に回りのすべてのものが波のよう
に揺らぎ、光が明滅する。
そしてすべての光が消える。

○救命艇内部

鉄男「なんだ！」

ステフ「一体何が！　またこの間のような
ことが！」

キャリー「ママ、怖い！」

鉄男「ジョン、これは一体！」

ジョン「もしかしたらと思っていたことが……」

ステフ「もしかしたらってなに？」

ジョン「うん」

鉄男「船内の照明は？」

ステフ、手探りで操縦席の前のパネル
に触る。

4人の上から光が降り注ぐ。

鉄男「前方を照らせない？」

ステフ、スイッチを入れるが、照明は
どこにも届かず、真っ暗闇のまま。

ステフ「テツツオ、テレポートして、この場所から逃げられない？」

鉄男「ここがどこかもわからない。

私は、目で認識できるところへしかテ

レポートできない」

ジョン「みんな、ヘルメットを脱いで」

ステフ「え？」

ジョン「宇宙服の酸素を止めて」

鉄男「そうか。

その酸素は最後まで取っておくんだ」

3人はヘルメットを取る。

ステフ、キャリーのヘルメットを脱が

し酸素のスイッチを切る。

ジョン「この救命艇の酸素は？」

ステフ「4人だから15時間前後」

キャリー「ママ、お腹すいた」

ステフ「そうね、この3日間流動食だけでも

のね。

ごめんね。

この救命艇にはトイレは無いから固形物は

食べられなかったの」

ジョン「吸引式のトイレがあるじゃないか。

ほら、この宇宙服の前の蓋を外して入れる

やつ」

ステフ「私は、便排泄は使いたくないの。

けっこう匂うのよ。

好みの問題ね。

尿排泄にはいいけど」

ステフ、足元のバッグからチューブを

4本取り出して、配る。

ステフ「とにかくなんか食べましょう。

気分が落ち着くから」

キャリー「これなに？」

ステフ「えーっと、コーンスープ」

ジョン「そうだな。

食べることはいいことだ」

4人、チューブのふたをねじって飲み

始める。

ステフ「ジョン、さっき言いかけたこと

は？」

ジョン「うん。」

最初の日にテッツオが月までテレポートした時のことだ。

光は1秒に30万Km進む。

ところがテッツオは一瞬で月までの38万Kmを進んだ。

これは、ヒューストンの言ったとおりだ。

そのとき私は気づいたんだ。

これは大変なことになると。

あの通信の遅れでマクニールが言っていたように、この船の中の時間と、外の時間が変わってしまった。

次に、ずいぶん先に進んでいるはずの7号に、やすやすと追いついたことだ。

これも時間の進み方が違っていたからだ。速い流れの時間は、密接にテッツオと連結しているようだ。

この先何が起きるのか・・・」

静かに重苦しい沈黙が。

鉄男「東キャンナル基地に連絡できないですか」

ステフ「通信スイッチを入れても反応なし」

ジョン「気を落ち着けて、静かに待とう」

キャリー「ママ、怖い」

ステフ「ごめんね」

鉄男「ダディがお話をしてあげよう。

それでいいだろ」

キャリー「うん」

鉄男「じゃ、目をつぶって聞いてね。

それでは、日本の古いお話。

昔むかし、あるところにおじいさんと、

おばあさんが住んでおりました。

おじいさんは、山へ薪拾いに。

おばあさんは、川で洗濯を。

その時川上から大きな桃が流れてきました、

ドンブラコ。ドンブラコ。

おばあさんは、しゃがんでその大きな桃を

力いっぱい持ち上げました。

とたんにおならがプー」

これを聞いてキャリーばかりか、ステ

フもジョンも笑い転げる。

ステフ「下品ね」

鉄男「テツツオはもともと下品な人でした。

そこへおじいさんが帰ってきました。

おおきな桃を見て、こりやうまそうな桃

だわい。

そういつて桃を持ち上げようとして、

おじいさんもおならをプー」

キャリーの喜ぶことこの上なく。

ジョン「どこまで続くんだい？」

鉄男「ケ・セラ・セラ。

なるようになるわ・

先のことなど、わからない。

そしておばあさんが包丁で桃を剥むこうとし

たとき、桃が二つに割れて、中から元気な

男の赤ちゃんが出てきました。

おばあさんは喜んで、おじいさん、不妊治

療に行かなくてすんだわと言いました。

おじいさんも、あれは高いからなあと、喜

びました」

キャシー「ふにんちりょうってなあに？」

ステフ「(笑いながら)大きくなったら教えてあげる。

バカね、テツツオ」

鉄男「テツツオは本当はバカでした」

鉄男は桃太郎の話に尾ひれを付けながら30分以上も話し続ける。

ステフ「テツツオ、この子、寝たわよ」

鉄男「ああそう、それはよかった」

ジョン「君はほんとに幼稚園の先生になればよかったのに」

鉄男「またその話ですか」

ジョン「さて、私たちも少し寝ないかね」

ステフ「そうね。」

この先何がおこるか分からないし」

こうして4人は不安の中目を閉じる。

T 14時間後

○同・機内

4人は、チューブのスープをすすって

いる。

ジョン「長いなあ、この時間。

いったいここはどこなんだろう」

鉄男「真っ暗で周りを照らしても、なんにも見えない。

星さえも」

キャリー「ダディ、息が苦しい。

それと寒くなってきた」

ステフ「酸素が減ってきたのね」

ジョン「救命艇のバッテリーも心配だ。

キャリーだけヘルメットを付けさせよう。

キャリーは子供だからそんなに酸素はいらないから、長持ちするはずだ。

我々はギリギリまでがんばろう」

ステフ「そうね」

ステフ、キャリーの宇宙服の酸素チューブを開き、ヘルメットを被せる。

ステフ「どう？ 楽になった？」

キャリー「うん」

T 「19時間後」

4人ともヘルメットを被っている。

ステフ「ジョン、なにか考えはある？」

ジョン「ずっと考えていたんだが、これが起こったのは救命艇が火星に着陸した瞬間からだ。

ちょうど、8号と7号のシューターが接続された瞬間と一緒だ。

これは時震（タイム・クエイク）じゃないかと思う。

違う進み方の時間が断層を超えて接触したときの・・・。

ここは火星のはずだろうと思うが・・・」

鉄男「あ、明かりが！」

ステフ「ほんとだ、明るくなっている！」

ジョン「明るい霧が・・・」

窓から見える外は霧に包まれたように。

次第に霧が晴れ始める。

前面の窓から、多くの建物が見える。

鉄男「よかった！」

「ここがどこか分からないけど」

キャリアー「どうしたの？」

ステフ「なんとか助かったようね」

外を見ると、1台のローバーが近づいてくるのが見える。

救命艇のそばで止まると、中から1人の女性と、1人の男性が、宇宙服もつけずに降りてくる。

ステフ「え？」

鉄男「なんで？ 宇宙服なしでは呼吸できないのに」

○火星の地上

鉄男、救命艇のドアを開き、ステップを踏んで、キャリアーをかかえて地上に降りる。

後の2人も降りてくる。

ステフ「こんにちは。」

マーズ8号のメディカル・オフィサーのミランです」

ヘザー・シングルトン（52）「マーズ8号？」

ステフ「ええ、マーズ8号です。

マーズ8号は無事に着きましたか？」

シングルトン「何のことかしら。

よくわからないけど。

ああ、私は東キャナル市長のシングルトン。

こちらは市の保安官ライアン・ホール（3

9）

ステフ「市長？ 保安官？

ところで、あなた方はなぜ宇宙服なし

で・・・」

シングルトン「火星に空気が供給されて

今は呼吸器なしで活動出来ています。

ご存じなかったですか？」

ステフ「そんなはずないでしょう。

火星に呼吸できる大気を作るのには10

0年かかると言われていましたけど」

シングルトン「そう、90年かかりました」

鉄男「え？ 90年？」

ステフ「今年は何年ですか？」

シングルトン「地球歴で2140年です」

ステフ「まあ！うそでしょう」

シングルトン「嘘じゃありません。

ともかくヘルメットを取られては？」

鉄男、キャリアーのヘルメットを取って

やる。

鉄男、ゆっくり自分のヘルメットを脱ぐ。

そこに現れた鉄男の髪が真っ白に。

ステフ「まあ、テツオ！」

鉄男「なに？」

ステフ「髪が真っ白よ！」

鉄男「ええ？」

ジョン「ほんとだ」

鉄男「それでマーズ8号の皆さんも無事でし

たか？」

ホール「ああ、やっとわかった。

昔の火星移住船のことだね」

鉄男「昔・・・ああそうか。」

マーズ8号は、100年近く前に火星に降り立ったんだ。」

ジョン「ということは、私たちだけが100年後の未来に弾き飛ばされたと・・・」

グレゴリー「あの有名なマーズ8号は、無事に火星に着陸できました。

乗組員の皆さんは、今はもう全員亡くなっていますけど。

船長のランカスターさんは、あなた方の救命艇を捜して、一生をそれに捧げました」

ジョン「なんとということだ！」

鉄男「あの、マーズ7号は？」

メイヤーズ「7号はギリギリのところでは火星の重力圏にとどまりました。

それから2年後、7号は修理されて、火星移住船として働き続けました。」

鉄男「地球の様子は？」

メイヤーズ「・・・」。

独裁国家連合と、民主主義国家連合の核戦争で、たぶん人類は生き残っていないと思

われます。

北半球は壊滅しました。

通信が途絶して35年になります

残っているのは、この東キャナル市の15

万人だけです」

鉄男「姉ちゃん！」

ステフ「お母さん！」

ジョン「マギー！」

地面に膝をつき。うなだれるジョン。

太陽と青い空の下の4人。

東キャナル市の街並みと、隣接する川

と森を食い入るように見つめる。

T（光瀬龍氏に捧ぐ）

終わり